

スカジに人肌のぬくもりを思い出させる話

ペトラグヌス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人助けが生きがいのドクターがスカジに人肌のぬくもりを思い出させようとする話です。

あのスカジのぱつと見お固いけど実は押しに弱いポンコツお姉さん感がたまらない

あとケルシー先生の元カノ感とアーミヤの娘感は異常

11/21追記

余りにも遅筆すぎて原作においていかれました。(まだ6-3のクソザコドクター)

話の大枠は騎士と狩人くらいの時期に決めてしまったので、一部原作と齟齬が生じてしまうかもしれません。できる限り原作を損なわぬようやっつけていきますので、何卒ご容赦下さい。

タグに”アーミヤ””ケルシー”を追加

短編↓連載に変更

目次

ドクターがスカジに出会う話	1
ドクターがスカジに興味を抱く話	6
ドクターがスカジに近づく話	13
ドクターがスカジとちよつと交流する話	21
ドクターがスカジに護衛される話	28
ドクターがスカジにくつつく話	35
ドクターがスカジに抱きしめられる話	44
ドクターがロドスに帰ってきた話	53
ドクターがケルシーと出会う話	63
ドクターがケルシーとお祝いする話	72

ドクターがスカジに会う話

ある小さな男の子の話をしてしよう。

その男の子は、少し内気で、物静かだけれど心根のやさしい、そんなどこにでもいるような子だった。でも、他の子と少し違うのは、お父さんやお母さんがいないということだ。

いや、きつとどこかで生きてはいるのだろう。ただ、男の子は置いて行かれてしまったのだ。

そんな男の子は、同じような子供たちと一緒に孤児院で暮らしていた。孤児院の暮らしは大変だ。朝から晩までいろいろな仕事をしなければならぬし、もし大人たちの癪に障るようなことをしたら、すぐに殴られる。そんな場所だ。

男の子たちには、ありとあらゆる罵声と暴力とが浴びせられた。親にすら捨てられたお前たちに価値なんてない、ゴミ以下だ、屑だ。

そうやって大人たちは、男の子たちに自分は無意味な存在であると刷り込み、自分たちの思い通りに使おうとしていたのだ。

男の子は、他の子どもたちよりも少しだけ賢かった。そして、愚かでもあった。

このままではきつと殺されてしまう。そう思った男の子は、孤児院から逃げ出したのだ。

裸足にぼろ布をまとっただけの格好。そんな男の子に、外の世界は過酷だった。誰も面倒事にかかわりたくはない。道行く人は、皆男の子から目を背けた。

冬の冷たい空気は容赦なく男の子の体力を奪っていく。そしてついには、どんよりと立ち込めた雲から雪が舞い落ちてきた。

もう限界だった。男の子は、自分な中で何かが切れるのをはつきりと感じたのだ。

あのまま孤児院に居れば、何の意味もなく死んでしまうと思っていた。外の世界に出れば、何かが見つけられると思った。でもそんなことはなかった。

この世界のどこにも、自分の生きていく意味などなかったのだ。

ふと、視界の片隅に何か地面に打ち捨てられたものが飛び込んできた。それは、どうやら生きているらしいが、息も絶え絶えといった様子だった。

仲間だ、男の子はそう思った。自分と同じで何の価値もなく生き、そしてそのまま死んでいく。そんな仲間だと。

その生き物の隣に座り込む。一度座り込んでしまうと、今まで立っていたのが不思議なほど力が入らなくなってしまった。いよいよ、死がそこまでやってきたのだとわかった。

だが不思議なもので、こんな時でも腹は減るものだ。男の子は、自分の腹から聞こえてきた音に、思わず苦笑いした。どうやら、隣にも音が聞こえていたらしい。暗闇に光るものと、視線が合うのを感じた。

懐からパンを取り出す。孤児院から逃げる時に持ってきたものだ。最期の時に腹が膨れていれば、少しはましな人生になるだろうか。

だが、もはや男の子はそのパンすら食べることができなかった。口を開けようとしても、歯がカチカチと音を鳴らすだけで、パンを受け付けないのだ。

そういえば、こいつはどうだろうか。隣に視線を向ける。その口元にパンを近づけてやると、ゆっくりと口を開いてパンを食んだ。

仲間かと思っていたが、どうやらそうでもないらしい。どちらにせよ、死ぬことには変わらないが。

男の子は、もうすべてがどうでもよくなった。

どれくらい時間がたっただろうか。いつの間にか雪は止み、空を覆っていた雲は消え去って晴れ晴れとした青い空が広がっている。

頬に生暖かい感触を感じる。耳元でやかましい鳴き声がする。うっすらと開いた視界の中で、地面に転がっていたはずの生き物が立ち上がってこちらをのぞき込んでいるのが見えた。

なんだ、結構元気じゃないか。昨日までの衰弱が嘘のような様子に、男の子は驚く。そして、気づいた。持ってきたパンの塊がすべて

なくなっていることに。

そうか。僕のおかげでこいつは助かったんだ。世界中から見捨てられていたこいつは、僕のおかげで助かったんだ。

男の子にとって、それはまさしく天啓であった。

そうだ。僕の価値は、ここにあつたんだ。この瞬間だけ僕は、世界中から見捨てられていたこいつを救った僕は、きっと世界中の誰よりも価値がある存在だ。

男の子は笑った。そして、その意識は再び闇の中へと沈んでいった。

僕は医者だ。それもかなり変わり者の。

何が変わっているかというところ、僕は非感染者ながら感染者の治療ばかりする医者だということだ。

僕としては、苦しんでいる人を救うのに感染者、非感染者の区別などないと思うし、むしろ世間から見捨てられている感染者の治療のほうが急務だとさえ思う。

ただ、世間一般からすれば僕は異常なようで、色々と大変な目にあつてきた。

でもここでは、気兼ねなく治療に取り組むことができる。この場所——ロドスでなら。

ロドスには、いろいろな人が集まってくる。それは鉱石病に苦しむ人であつたり、そんな人を助けようとする人たちであつたり、ちよつとマツドな研究者であつたり……様々だ。

僕の仕事は鉱石病の治療とその研究。それに加えて、今は作戦指揮も担当している。そんなわけで、僕もロドスのちよつとしたお偉いさんだ。

お偉いさんというのは、ただ偉いんじゃないやなくて色々やらなければいけないこともあるわけであり、新規戦術オペレーターとの面接なんかも僕の仕事だ。

ロドスの行うような作戦においては、オペレーター個人の力量、特性が非常に重要になってくる。だから、これも指揮官として非常に重要な仕事ではあるんだけど……

「あなた、本気で私を雇うつもり？ 私がいれば、厄災を招くかもしれないのよ」

こんな風に、ちよつと怖い人と一対一でやりあわなきゃならないのは何か違う気がするんだ。そんなこと口が裂けても言えないけれど。「ええ。本気ですよ、スカジさん。ロドスはあなたの力を必要としています」

まあ、僕だつてある程度の場合数は踏んできている。こういう相手に対しては、一步も引かずにこちらの熱意を伝えればいいんだ。

「……そう。本気なのね」

そういうスカジさんの目は、透き通るように冷たい。その目で射すくめられたら、逃げ出したくなってしまうほどに。けれど、僕に逃げるという選択肢は残されていない。

そんなことをしたら、僕を拾ってくれたロドスの看板に泥を塗ることになるし、僕にもプライドっていうものはある。だから、僕は逃げたいたくなる気持ちを押し殺して、彼女の目をじっと見つめ返した。

お互いにお互いを見つめあつて、沈黙の時が流れる。永遠に続くかと思われたその沈黙に終止符を打ったのは、彼女の言葉だった。

「……わかつたわ。でも、私には近づかないほうがいいわ。あなたも面倒事は嫌だろうし、私だつて困るのよ」

「わかりました。では、改めてよろしくお願いします、スカジさん」
返事はなかった。だが、きつとそれが彼女のやり方なのだろう。少なくとも、仕事はしてくれるに違いない。

緊張の糸が切れると、どつと疲れが出てくる。それにしても、彼女は何というか、何としても人を近づけたくないとでもいうのだろうか。

とにかく人を遠ざけるような言動をしていたな。あれではあまり他のオペレーターからは良い印象を得られないだろう。こちらでフォローする必要があるかもしれないな。

それに……近づくなというときに一瞬見せたあの瞳の揺らぎ。あれはいったい何だったのだろうか。

彼女の履歴書を見る。なかなかひどいものだ。数々の作戦に参加し、そのすべてにおいて多大な成果を上げている。すばらしい経歴だ。……彼女以外の参加者が悉く全滅しているということを除けばの話だが。

ついた渾名は“厄災”、“凶星”、その他諸々。いずれにせよ、良いようには思われていないということは確かだ。

彼女もまた、世界から見捨てられてきた存在なのかもしれない。

だとすれば、これは僕の領分だ。僕の仕事は、世界から見捨てられた存在を救うこと。

それによって僕の価値は証明され——それ以外に僕の価値はないのだから。

ドクターがスカジに興味を抱く話

僕は正直なところ彼女、スカジのさまざまに逸話について、どれも誇張されたもののではないかと考えていた。

常識的に考えて山を消し飛ばすなどできるはずがないし、一振りで百人をなぎ倒したあの言う与太話が信じられるわけもない。

彼女の経歴と言動とが生み出した、根も葉もない噂だと思っていたのだ。

そして今、僕はそんなことを考えていた過去の僕をぶんなぐってやりたいと思っている。

結論から言えば、彼女の噂は本当だった可能性が高いということだ。ケルシー先生の助言を受け入れていなければ、危うく部隊が全滅するところだった。

彼女の初陣は、ちよつとした感染者の武装蜂起の鎮圧だった。当初の計画では、彼女は前衛オペレーターとして他のオペレーターとともに投入する予定だったのだが、ケルシー先生から珍しく横やりを入れられたのだ。もちろん、僕がケルシー先生に逆らえるわけもなく、彼女は強襲偵察を行うことになった。そして、それが蜂起した彼らの運の尽きだった。

他のオペレーターが現場に到着した時に見たのは、瓦礫の山と地面に横たわる何十人という蜂起の参加者たちの姿だった。彼女は、その中心で一人佇んでいた。

偵察班の子が震えながらに話してくれたことによると、彼女は真正面から敵のアジトに突っ込み、剣の一振りであの現象を引き起こしたのだという。俄かには信じがたいが、同様の証言が複数のオペレーターから得られた。ということは、それが真実なのだろう。

これ以降、彼女には単独行動が命じられた。それを告げられた時の彼女は、いつもの如く短く返事をしただけであつたが、どこか安堵しているように見えた。

問題はまだまだ続く。彼女の作戦行動に伴って発生する、近隣住民への補償の数々。このままではロドスの財政状況は火の車だ。

それに、何よりの問題はやはりコミュニケーションの部分だろう。彼女の戦いぶりに加えその人を寄せ付けない言動、さらには過去の様々な噂が広まったことによって、彼女はロドスにおいても完全に孤立してしまつたのだ。

問題も多いとはいへ、彼女がロドスにとつて重要な戦力であることは間違いない。このまま孤立が続き、それが彼女の排斥へと発展するようではまずい。

そこまで至らなくとも、コミュニケーションの不足は作戦において重大な過失を招く恐れもある。

それに、僕自身、組織内の空気が微妙に変わってきているのを感じているのだ。いい変化ではないのは間違いないだろう。

「それで、アーミヤはどうすればいいと思う?」

「……私も、スカジさんの悪い噂を言うのは控えるように皆さんにはお願いしているんですが……人の口には戸が立てられないということかもしれません」

夕方の執務室。僕は、この小さな少女、アーミヤと一緒に作戦会議を開いていた。ロドスのリーダーであるアーミヤのお願いであつても、噂というのはどうにもならないらしい。まあ、仕方のないことではあるが。

「うーん、しゃべるなど強制はできないし……噂は誰かに話したくないものだからなあ……」

「……あつ!ならドクター、スカジさんのいい噂を流すのはどうでしょうか?」

「いい噂?」

「はい。皆さんが噂を話してしまうのなら、その内容をなるべく良いようにとらえたものにすればいいんです。それで悪い噂をかき消してしまえば……」

「おおーなるほどー……アーミヤは賢いな……」

そういう手もあるのか。なるほど、話したくなってしまうのならむ

しろ積極的に話させればいい。こちらがなるべく感じ良い噂を流せばいいわけだ。

例えば、スカジへの恐怖を畏敬の念に変えるような、そんなふうに変えられれば。

……それにしても、アーミヤは分かりやすくいいな。今も嬉しそうに耳をぴくぴくさせている。どれ、頭も撫でてやろう。

「ドクター……えへへ……」

かわいい。スカジも、これくらいわかりやすければもつとどうにかなるだろうに……まあ、そうじゃないからこんなことになっているんだろうけど。

「あとは、やっぱり本人の態度だな……」

「えへへ……」

「アーミヤ？」

「あつ、はい。やっぱり、スカジさんの皆さんへの態度もこの状況を作ってしまったている原因だとは思いますが」

「見かねて声をかけた皆さんも、にべもなく断られてしまったよう……」

そうだろうな。あの目といいあの言葉といい、彼女自らが人を遠ざけているのが最大の原因なのだ。その度合いは、もはや一人が好きだという次元を超えている気がする。

何か理由がなければ、あそこまでかたくなな態度はとらないだろう。

「じゃあ、そつちについては僕が何とかするよ。アーミヤは噂のほうをよろしく頼む」

「わかりました。ドクター、頑張ってくださいね」

頷いて親指を立てて見せる。これにて作戦会議は終了。あとは各自の仕事だ。

また一対一で彼女と話し合うのはきついものがあるが、実は少し楽しみでもある。

父さんには顔向けできないけれど……やっぱり、人を助けるとするのは最高に気持ちがいい。自分の存在意義をありありと感じられる

んだから。

もしも彼女の孤独が望まぬもので、もしも僕が彼女をその孤独から救うことができたら。

いったい僕は、どれほどの価値を自分に見出すことができるんだろうか。

「前に言ったわよね。私に近づかないほうがいいって」

「そうもいってられない状況になったんですよ、スカジさん」

一言目からこれだ。善意で声をかけてこれを言われたらかなり精神的に来るし、怒りすらわいてくるのではないだろうか。

「……スカジでいいわ。あまり畏まられても困るの」

「……じゃあスカジ、単刀直入に言うぞ。……なぜそうやって人を遠ざけようとするんだ？」

「……これも前に言ったわよね。私といると面倒事に巻き込まれる。あなたも困るだろうし、私も困るのよ」

……そうだ。彼女はずっと言っているじゃないか。“私も困る”と。なぜ僕が面倒事に巻き込まれると彼女が困る？

誰かというのが嫌で孤独でいるのなら、他人が巻き込まれてどうなろうが彼女の知ったところではないはずだ。

「僕が面倒事に巻き込まれたとして、どうしてスカジが困るんだ？別に何も困ることはないだろう」

「……目覚めが悪いのよ」

目覚めが悪いということは、少なくとも心のどこかで他人に対して心遣いがあるということだ。他人を思いやる心があるということだ。

そうやって言葉だけ自分本位なように見せかけても、その心根までは隠し切れない。

本当に自己本位な奴は、そんなことは考えない。自分が満足さえできれば、行為の対象がどうなったところで感じるのは快感だけだ。

なら、彼女は……

「……要するに、自分に巻き込まれて誰かが傷つくのを見たくない。

誰かを傷つけない。そういうことか」

「……………」

「……そうよ。だからもうあなたも近づかないで。私の戦いを見たでしょう？あなたを危険な目にあわせてくはないから」

彼女は、救われるべき存在だ。誰かを傷つけないために他人を遠ざけようとする、そんな優しい心の持ち主は。

小さな男の子が目を覚ますと、そこは見知らぬ天井でした。意識がはつきりしてくると、それ以外のことに気づき始めます。自分が仕立てのいい服を着せられていること。

自分がふかふかのベッドで、暖かい布団をかけられて寝ていたこと。どれも、男の子が生まれてきて初めて経験したことでした。

しばらくすると、優しいそうなおじさんがやってきました。そのおじさんこそが、道で倒れていた男の子を助けた人だったのです。

おじさんはお医者さんでした。男の子がベッドで横たわっている間にも、たくさんのおじさんのもとにやってきました。おじさんは、その一人一人の悩みを次々と解決していきました。おじさんは、たくさんの人を救っていたのです。

やがて、男の子はすっかり元気になり、おじさんは男の子を家まで送ろうとしました。しかし、男の子に家などありません。孤児院に戻れば、きつと殺されてしまいます。

男の子はおじさんに必死にお願いしました。手伝いでも何でもし

ます。だから、おじさんの所に居させてください、と。

おじさんは独り身でした。おじさんは、その人生のほとんどを医者
の仕事に費やしてきた人でした。人並みの恋など、しようともしてこ
なかつた人でした。

後悔などしていません。ですが、子供がいないということには、す
こし寂しさを抱いていました。

男の子は、受け入れられました。おじさんは男の子をまるで我が子
のように扱い、男の子もまた、おじさんが本当のお父さんのように感
じられるようになりました。

二人は、家族になりました。

幸せな時間はあつという間に過ぎていきます。男の子はすくすく
と育つていき、やがておじさんと同じように医者になるといいまし
た。

男の子は、医者という仕事こそが自分の天職であると考えました。
人を救う仕事。そのような仕事をすれば、自分はとても価値のある存
在になれると思つたからです。

おじさんはとても喜びました。我が子が自分と同じように人を救
う仕事をしたいといつてくれたことが、本当にうれしかったのです。

おじさんは男の子にいろいろなことを教えてくれました。医者は
どうあるべきか、人を救うとは何であるか、人はどうあるべきか。い
ろいろなことを教えてくれました。

そのすべてが男の子の血となり肉となりました。もともと優しい
心の持ち主であつた男の子は、立派な人物へと育つていきました。

ですが、育つていくにつれてある一つの葛藤が生じました。人を救
うのは患者のためである。社会のためである。自分以外のすべての
存在のためである。男の子は、そうおじさんに教わってきました。ま
た、自分もそうでありたいと思つていました。

でも、ダメなのです。男の子は人を救つたとき、確かな満足が得ら
れました。自分が生きている価値を感じることができました。人を
救うことよつてのみ、自分の存在意義を見出すことができました。
男の子は、自らのために人を救つていたのです。

男の子は苦しみました。もちろん、そんなことをおじさんに言えるわけありません。男の子は一人孤独に、自分の理想と現実の欲求と
の間の齟齬を乗り越えようと思いました。

そうして、男の子は考えることをやめました。自分が生きている限り、この欲求からは逃れられないことを悟ったのです。

それから、男の子はこれまで以上に熱心に人助けをしました。人を救っている時の自分だけが、男の子にとっての価値ある自分でした。

そんな男の子がそれと出会うのは、必然でした。

ドクターがスカジに近づく話

結局、話はそれっきりで終わってしまった。一応彼女には他のオペレーターとの接し方をもう少し差し障りのないものにしてほしいとお願いはしたが、いい返事をもらうことはできなかった。

まあ、いいさ。それ以上に、僕にはやるべきことができた。スカジを救う。何と甘美な響きだろう。

僕は彼女の過去について、履歴書にある以上のことは知らない。けれども、その内容と数度交わした会話からだけでも、彼女の抱える深い闇を感じ取ることができる。

誰一人として彼女の傍に居続けることができた人さえいないのだ。彼女の闇を取り除くなど、到底できないことなのかもしれない。

そもそも、彼女は救われたいなどとは思っていないのかもしれない。でも、それがいい。最高だ。

今まで誰もできなかった？これから僕がやってやろう。

救われたいと思っていない？知ったことか。

彼女を救った暁には、僕はこの十年生きてきた人の中で、最も価値ある人間になれる。それだけで十分だ。

……僕は、それ以上を望める人間じゃない。

さて、これからどうしようか。最終目標は彼女の闇を取り除くこと。なれば、その前の段階としては彼女の傍で寄り添うというのが妥当だろう。今のところ、僕と彼女は業務の話しかしていない。まずは、日常的に会話ができるようになることが目標かな？アーミヤにも聞いてみよう。

「で、アーミヤはどう思う？」

次の日の朝。僕はアーミヤと一緒に朝食をとっていた。どうやってスカジに近づくかの作戦会議のためだ。

「……他のオペレーターの皆さんでは難しいと思いますし、まずドクターがスカジさんと仲を深めるのはいいことだと思います。けれ

ど……」

なんだろう。今一つアーミヤの歯切れが悪い。別に反対というわけではなさそうだけれど……

「けれど？」

「……いえ、大丈夫です。でも、それってかなり大変じゃないですか？」

「なら、僕の大好物じゃないか」

「ああ……そうでしたね」

どうやら納得してくれたようだ。……これで納得されるというのも考え物だけど。まあ、それなりに長い付き合いだ。アーミヤも僕がこの病的な行動についてはよく知っている。

「それで、当面の目標として日常的に話す仲になろうと思うんだけど、どうすればいいかな？」

「うーん、そうですね……」

「あつ、思いつきました！ドクター、こんな風に一緒に食事してみてもどうでしょうか？」

「……うーん、ちょっと段階を飛ばしすぎじゃないか？食事に誘うなんて、まるでデートだ」

「で、デート!?ち、違います！」

アーミヤの顔は真っ赤だ。やっぱり、そういうのにも懂れる年ごろなのか。誰か意中の相手でもいるんだろうか？

……しかしまあ、アーミヤは本当にわかりやすいな。それに比べて、スカジが赤面するところなんか……うん、想像もつかない。

「違うの？」

「違いますー……オペレータースカジはいつも一人で食事をしているみたいなんです」

「一人で？自室でか？」

「いえ、食堂で食べているみたいです。皆さんとは時間帯をずらしているみたいですね」

「なるほど。そこに相席するわけか」

「はい。食事の場なら自然に向き合うことができますし、話題も出や

すいですしね」

毎度のことながら、アーミヤのアイデアには感心させられるな。僕には思いつかないようなことをいとも簡単に思いついて見せる。

「よし、そうと決まれば早速やってみるか！ありがとうな、アーミヤ。いつも助かるよ」

頭をなでてやると、アーミヤは嬉しそうに耳を動かしながら小さく頷いた。

よし、早速食堂に行くか！

「あつ、ドクター。仕事はちゃんとしないとだめですよ？」

……はい。

……ドクターはずるい人です。

なでられた頭に手を重ねてみると、そこにはほんのりとドクターのぬくもりが残っていました。

胸がキュツと締め付けられます。頬が熱を帯びるのがはつきりとわかりました。

いつからでしょう。私が病気にかかってしまったのは。

この病気は、きつと世界中に誰にも治すことはできません。そう、一人の“お医者さん”を除いて。

でも、多分だめだと思います。この病気が治ることはきつとないでしょう。

だって、ドクターの眼に私は映っていません。

どれだけ必死に訴えても、届きはしないのはわかっています。だから

……

……わかっています。わかっているんです。

……それなのに！

どうしてドクターは、私にやさしくしてくれるんでしょうか。

どうしてドクターは、私を頼ってくれるんでしょうか。

ある時は自分の子供に対するかのように。ある時は友人であるかのように。

そんな無茶苦茶なことをされたら、私の心まで無茶苦茶になってしまっじやないですか。

いつかは私のことを見てくれるんじゃないかって、そう勘違いしてしまっじやないですか……！

……ドクターはズルい人です。

仕事を終わらせると、もう時計の針は0時を回っていた。

ここ数日間のツケが回ってきたようで、結局食堂に行くどころではなかった。

幸いにも、ロドスの食堂は24時間営業だ。さて、ちよいと遅めの晩御飯と洒落込みますか。

食堂への廊下を歩いていると、何やら料理を作る音が聞こえてくる。どうやら先客がいるようだ。

こんな時間に珍しい。

食堂に入ると、先客が誰だかはすぐにわかった。長く、艶やかな銀糸が目にもまぶしい。

向こうも誰かが来たとは分かったようだが、特に反応は帰ってこない。まあ、そうだろうな。

注文を終え、席に向かう。だだっ広い食堂に足音を響かせながら、少しづつ彼女に近づいていく。

やがて足音は止み、僕は彼女の向かいの席に座った。物憂げな瞳がゆっくりと持ち上がり、僕を射抜く。

はあ、とため息をつき、彼女は口を開いた。

「……あなた、人の話を聞いていたの？言つたわよね」

「近づかないほうがいい、だろう？そのことに関してはお互い様だ。スカジだって僕の言うこと聞いてくれないんだから」

「っ……」

僕の返答に、彼女は少々面食らったようだ。してやったり、といったところかな？

とはいえ、嫌みを言いに来たわけじゃない。弁明しようと口を開きかけたとき、彼女が再びため息をついた。

「……………はあ」

「……………私のことを憐れんでいるのかしら？ひとりぼっちでかわいそう、そんな風に思っているのかしら」

「……………だとすれば、勘違いも甚だしいわ」

「周りに居られると迷惑なの。邪魔でしかないのよ。表も裏もなく、ただ額面通りに」

「……………理解したかしら？じゃあ、早く私から離れなさい。余計な同情も早く捨てることね」

淀みなく流れ出す言葉の数々。彼女はそれらを言駈れているように感じた。

きつと、これまでもこうして人を遠ざけてきたんだろう。

こうまでのはつきり言われてしまったては、同情心とやらも霧散してしまふことだろうな。

まあ、僕にはさして関係のない話だけれど。

「スカジこそ勘違いしているみたいだね」

「……………？」

「僕は君に対してこれっぽっちも同情なんて抱いてないさ」

「それに好かれようとも思っていない。邪魔だとか迷惑だとか思われようがそんなことは別にいいんだよ」

「ただスカジと話したい。君のことを知りたい。ただただ僕の欲望のために」

善意なんかじゃない。飽くまで自分の欲求を満たすために。

きつと僕は彼女が今まで出会ってきた人間の中でも最低の人間だろう。

でも、善意なんかよりも純粋な欲望だからこそ、僕は彼女を救うことができないはずだ。

「……………あきれた人ね」

「……………好きにしなさい。ただし、死んでも文句は言わないことね」

「……………ああー！」

思わず言葉から喜色が滲み出してしまふ。これでようやく一歩前進することができた。

たかが一步、されど一步。このまま歩いていった先で、僕はどんな景色に出会うことができるのだろうか。

「そういえば、スカジは何を頼んだんだ？僕は夜も遅いし、胃にやさしいお粥にしたんだけれど……」

「……」

「……」

「そういえば、スカジは何を頼んだんだ？僕は夜も遅いし、胃にやさしいお粥にしたんだけれど……」

「……はあ。……ラーメンよ。これで満足かしら？」

「なるほど、二回言えば反応してくれるのか……」

「……一回で十分よ。……はあ」

……千里の道も一步より。このまま進んでいけば、いつかはたどり着ける……のか？

鉋石病感染者。

男の子が彼らと出会ったのは、薄汚い路地裏でした。いつものように、そこに暮らす貧しい人たちを相手に診療をしていた時のことです。

全身をぼろ布に包んだ見慣れぬ男がやってきたのは。

初めはただの新人りかと思いましたが、ただ、どうにも様子が変です。

何かにおびえるように顔に巻き付けた布を握りしめ、血走った眼をあちらこちらに向けているのです。

男の子は、何らかの伝染病ではないかと思い、その男を違う部屋に隔離しようと思いました。

その時です。診療を待つ人の中から、悲鳴とともにその言葉が発せられたのは。

「感染者だ！」

そこからはもう、地獄絵図です。怒号と悲鳴が辺りにまき散らされ、我先にと逃げ出す人々が事情を知らぬ幼い子とその母を踏みつぶしていきました。

そうして、すべてが終わったとき、そこには一つの死体が残されていました。

男の子は歓喜に震えました。世の中には、こんなにも救われぬ人がいるのかと。

それから男の子は、鉱石病について研究を始めました。

そのことを知ると、おじさんはいたく感激しました。我が子の救われぬ人を救いたいというその志にです。

おじさんもかつて、鉱石病の感染者を治療したことがありました。あらゆる手を尽くしました。しかし、どんな手を尽くしてもその人を助けることはできませんでした。

そのことは、おじさんの心の中で大きなしこりとなっていたのです。

自分がかつて為し得なかったことを、この子には成し遂げてほしい。

そう思ったおじさんは、男の子を遠くの大学に行かせることに決めました。

鉱石病の研究で最先端に行く大学です。

それを知った男の子は、ますます勉学に励みました。

その環境ならば、自分の求めるものが得られるに違いないと確信したのです。

やがて、男の子は無事にその大学に入学しました。

エリートぞろいの大学にあっても、男の子の能力は頭一つ抜きん出たもので、たちまち花形の鉱石病研究室へと配属されました。

そこで、男の子は運命の出会いを果たします。

その人はとても優秀な研究者でした。

研究者として優秀なだけでなく、現実的な力も持ち合わせた人でした。

男の子は、優秀な研究者としてその人の組織にスカウトされました。

この人についていけばきっと自分はより多くの人を救うことができる。

そう思った男の子は、この申し出を受けることにしました。

男の子をスカウトしたその人は、組織においてこう呼ばれています。

“ケルシー”と。

ドクターがスカジとちよつと交流する話

深夜の食堂での出来事の後から僕とスカジとの交流が始まった。

交流と言っても、ほとんどこちらから一方的に話しかけているだけだけれど。

はじめのうちは無視されてばかりだったけれど、粘り強く話しかけた結果、素っ気ない返事はもらえるようになった。

自分でやっていて言うのもなんだけど、無視し続けるのって結構難しい。

あまりにも鬱陶しいと、それが相手を喜ばせるとわかっていてもつい怒鳴りつけてしまうものだ。

その点彼女は、よく自分をコントロールできている。素っ気ないながらも返事をする事で相手を多少たりとも満足させその場をしのごい、いつか飽きるのを冷静に待っているのだ。

本当に手馴れていて、手強い相手だと思う。

それでも、そんな気のない態度の中にも見るべきものがある。

例えば、僕のくだらない話に返事するときの呆れたような目。

いつものこちらを射竦めるような目とは全く違う目だ。

例えば、食堂の美味しいご飯を食べているときの表情。

鉄仮面のような彼女の表情が、この時ばかりはほんのわずかに緩むのを僕は知っている。

少しずつ、彼女のことを知っていく。一度の会話で得ることのできる情報は、本当に僅かなものだ。

でも、だからこそ、その僅かな情報の一つ一つが力を増す。さながら、水鉄砲のように。

そんな毎日はとても楽しい。

目標に一步步ずつ着実に迫っているという確かな実感が、僕に愉悦と安らぎを与えてくれる。

だから僕は、彼女との会話が好きだ。

「そうだ、スカジ。聞いたかい？」

「……何をよ」

「近くの都市で暴動が発生したって話だよ」

ある日の夜。0時近くの人気のない食堂で、僕とスカジは話していた。

近頃は感染者の暴動が多い。まあ、現状の各国政府の感染者への処遇を考えると致し方無い部分もあるとは思う。

だけど、個人的意見としては暴動は好ましくないかな。そんな非合法手段に出られてはこつちもあまり擁護できないし、要請を受ければ処断しなきゃいけない。

僕も医者 of 端くれではあるし、あまり殺したくはない。

まあ、この仕事もケルシー先生のおかげだからやってるだけだしね。

「……へえ、そうなの。興味もないし、知りもしなかったわ」

「……まあ、スカジの出番はないだろうけどさ」

そう、まず間違いなく彼女の出番はないだろう。まだ稼働中の都市だ。損害賠償はもう勘弁して欲しい。

だが、そこが恨めしいところでもある。

「……やだなあ」

「？」

「……いや、しばらく会えなくなると思うとね」

聞いた感じだとかなり規模が大きく、当局だけでは対処しきれないようだった。

ということ、スカジは留守番で確定。僕は駆り出されることで確定。

暴動が落ち着くまでは、向こうから帰ってこられないだろう。

「……いいじゃない。これで厄災に会わずに済むわよ」

「いいわけないさ。これでも僕はスカジと話すのを楽しみにしてるんだ」

「……本気で言ってるのかしら？」

「本気だよ」

「……はあ。……あなた、本当におかしい人ね」

そう言う彼女の瞳は、見たことのない色をしていた。また、僕の知らない彼女だ。

蔑むような、憐れむような、そんな目。なのに、あの鋭利な冷たさを感じないのはどうしてだろう？

彼女が何を考えているのか、何を感じているのか、僕にはわからない。

でも、そう悪い事ではないんじゃないかって思う。

……あくまで希望的観測だけだね。

「……………」

次の日の朝。アーミヤから暴動の鎮圧を指揮するように言われた。予想通りだ。

まあ、心の準備はできていた。特に驚くこともなく、淡々と準備を進める。

わかる限りの情報——暴徒の規模、武装、現地の地形——から、最適な人員をピックアップ。

シチュエーションに応じた人員の配置を想定。

ここまでやれば、僕の仕事は九割が終わったといっても過言ではない。戦いは準備の段階でほとんど決着がつく。

僕は残りの一割のために現地へ赴くというわけだ。

ただ、この一割が腕の見せ所でもある。不測の事態に対応するためには、現地にいるのが一番だ。

準備はあらかた終わった。オペレーター達も準備が終わる頃だろう。連絡があり次第出発だ。

ところで、僕には特に戦闘能力はない。

一応護身のために銃は持つてるけど、別に使えるわけじゃない。アーツも使えないしね。

移動手段も乗り物か徒歩かだし、戦えもしなければ逃げることもできないというわけだ。

別に最前線に出向くわけではないし、後方の指揮所にいるだけだ。そう危険はないと思うけどね。

だけど、最近ロドスの名も結構売れてきたし、あんまり無防備なものも考え物かもしれない。

特別に護衛でもつけたほうがいいかな？今度アーミヤに相談してみよう。

……ケルシー先生に言っても却下されそうだし。

トントン、とノックが聞こえる。出撃オペレーターの誰かだろう。準備が終わったのを知らせに来たのかな？

なら、わざわざ入ってもらわなくてもいい。こっちから出るとしよう。

「ああ、今行く。ちよつと待っていてくれ」

声をかけてからドアを開けると……

「……」

そこにはスカジが立っていた。

……なんとも意外な人物だ。今までスカジのほうから話しかけてくることなんてなかったのに。

「スカジ……う？そっちからくるなんて珍しいな」

「……勘違いしないで。仕事を頼まれただけよ」

「仕事？」

「……そう。代表からあなたの護衛を頼まれたのよ」

「代表？……ああ」

アーミヤか。相談しようと思っていた矢先にもう寄越してくるとは……やっぱ頼りになるな。

でも、アーミヤのお願いとはいえ、まさか受けるとは意外だ。

「……しかし、頼まれたとはいえ、まさかスカジが護衛してくれるなんてな」

「嫌ならいつでも変わるわよ」

「嫌なわけではないさ。頼もしいよ。これなら何が来ても安心だ」

スカジの身体能力はオペレーター達のお墨付きだ。これ以上の人材はない。護衛なら建物を壊すようなこともないはずだし。

「……はあ。厄災に会わないように祈ることね」

「……でも、その厄災とやらからも守ってくれるんだろう？」

「………はあ」

そう言っただけで彼女は大きなため息をついた。暫しお互いの間に沈黙が広がる。

それを破ったのは、オペレーター達の準備完了の知らせだった。

「よし、じゃあ出発だ。護衛を頼むよ」

「………わかったわ。……あまり私から離れないで」

いつもと真逆のことを言われるので、すごく変な気持ちだ。すごく快い。

少しの間だけのことはわかっていても、それでも僕は胸の昂りを抑えられなかった。

「……………」

男の子の入った組織は、とても大きな組織でした。一員になったとはいえ、男の子は一介の研究員です。

組織が何をしようとしているのか、何のためにあるのか。そんなことは知りようがありませんでした。

男の子もまた、それを知ろうとはしませんでした。彼にとって重要なのは、ここでは大学以上の研究ができるということだけだったのです。

男の子をスカウトしたケルシーもまた、研究員の一人でした。

ただ、男の子のような平の研究員とは違い、指導的立場にあるようでした。

加えて、研究者としても彼女は超一流でした。鉱石病のみならず、あらゆる学問に精通しているのです。

男の子は、天才というのはこの人のことを言うのだろうと確信していました。

彼女は、自分では超えようのない才能の持ち主だと。

だからこそ、男の子は彼女についていくことを決めたのです。

男の子はどこまでも純粹でした。ただただ純粹に、自らの知識欲を満たしていきました。

そこには、他の多くの研究員達が持っていた嫉妬や諦めはありません。

男の子はただ純粹に、自らの手で助けられる人が増えるということに喜びと価値を見出していたのです。

間もなく、男の子は大学を辞め、組織での研究に没頭するようになりました。

その没頭のしようは半端なものではありません。

24時間365日、男の子の意識が研究から離れることはありませんでした。

寝る間を惜しみ、食事の間ですらペンは止まることを知らず、誰よりも早く研究室に入り、誰よりも遅く出ていく毎日を繰り返しました。

その様子を見たケルシーは、男の子に問いかけました。

どうしてそこまでするのかと。

それは、純粹な疑問でした。彼女から見ても、男の子は紛うこと無き天才です。

いつ組織から放り出されるかわからない木っ端のような研究員達とは違い、彼はこの先も組織に求められるような人材です。

研究者にとって命の次に大事な研究は、これからも思う存分できるはずなのです。

一体何が彼をこうも駆り立てるのか、ケルシーにはわかりませんで

した。

問われた男の子は、ただこう答えました。

それが生きる意味だからと。

やはり、ケルシーにはよくわかりませんでした。

そんなことは生まれてから一度も考えたはありません。

ただ生きている。それ以上でも、それ以下でもなく。ケルシーにとっての生など、精々そんなものでした。

だから、理解のしようがなかったのです。

それでも。表情一つ変えることなくそう言っただけのけた男の子のことを、ケルシーは少しだけ羨ましく思いました。

生まれて初めて、羨ましいと思いました。

ドクターがスカジに護衛される話

僕はオペレーター達を引き連れて件の都市へと到着していた。

僕たちのいるエリアの治安はまだ保たれているようだけど、遠方に黒煙がちらほら見える。

このままでは、情報が提供された時から事態がどう進行しているのかどうかもわからない。

何はともあれ、まずは情報収集だ。偵察部隊を派遣して、僕はクライアントに会いに行くでしょう。

数時間後。治安当局から提供された建物で、僕たちはこれまで得た情報の整理をしていた。

僕があつてきた局長さんは、ロドスはあくまで有事の際の備えであつてゆつくりしていただいて構わないだとかなんとか言っていたけれど、本当のところはどうだろうね。

事態が好転しかけたから手のひらを返しただけならいいんだけど、正しく状況を認識できないでいるだけなら僕たちの身まで危うくなる。

偵察部隊からの情報をまとめるとこうだ。

現時点で路上の暴徒はほとんど姿を消し、散発的な当局への攻撃が行われているだけで全体としては終息へ向かっているように見える。

がしかし、暴徒のほとんどは地下に潜伏して体制を整えており、散発的な攻撃もハラスメント目的によるもの。

恐らくは近日中に総攻撃を開始するだろう――。

それを聞いた僕は頭を抱えなくなった。何がゆつくりして構わないだ。そんな組織された暴徒だなんて聞いてないぞ。

当局はいつたいう情報収集をしているんだらうか。

とにかく、この事実をすぐに当局と共有したほうがいいだろう。それに、ロドスのほうにも応援を要請したほうがいい。そこまでやる気のある相手だとは考えていなかった。

にしても、この暴徒達の組織化はどういうことだらうか。

暴徒は基本的にただ暴れているだけだ。特に具体的な計画があるわけではない。

ただ漠然と現状への不満を抱き、たまりにたまったそれを取り敢えず爆発させているといい。

だから、対処は単純だ。シンプルに当局側の力を見せてやればいい。

いくら不満があろうと、それを具体的にどうこうする手段がなければ、圧倒的な力の差を前にできることは無い。

できることがなくなってしまうえば、後はおとなしく家に帰るしかないだろう。

ということは、逆説的に今回の暴徒はそれをどうにかできるだけの手段を持っているということだ。

それも、ただの暴徒を組織だって行動させることができるほどの。こうなってしまうえば、もう敵の頭を狙い撃つしかないだろう。

この規模の組織が今の今まで摘発されてこなかったというのは不自然だ。

恐らくは、感染者達を煽った上でこの計画に参加させた奴がいるはず。

ただの暴徒をまとめ上げるカリスマの持ち主だ。そいつがいなくなれば、暴徒たちはたとえ力を持っていたとしても、内ゲバを起こして自滅するだろう。

最も、まだ推測でしかないし、外れていたら最終手段を取らなきゃいけないけど。

取り敢えずロドスに応援要請をし、局長とのアポもとった。明日の早朝には話し合いの場を持てるだろう。

もうすっかり夜も遅くなってしまうたし、明日に備えて僕もそろそろ寝るとしよう。

会議室を出て寝室に向かう。外は曇りなのだろうか。窓の外からの光はない。

深夜の廊下は、非常口の標識の緑でうつすらと照らされていて気味が悪かった。

何かが出てきそうな雰囲気だ。あまり幽霊の類を信じていないとはいえ、一人では歩きたくない。

まあ、今なら例え幽霊が出ようと安心だけでも。

しばらく廊下を歩いて自室の前までたどり着くと、僕は後ろにいる彼女に声をかけた。

「とりあえず、今日は一日お疲れ様。また明日も頼むよ、スカジ」

そう。今日は一日中、彼女が僕の護衛についてくれていたんだ。

局長と面会した時も、会議中も、さつき廊下を歩いている時だって、ずっと。

いやはや、それにしても変な気分だよね。いつもは僕が近づいて彼女が離れていくのに、今日は僕が離れて彼女が近づいてくる。まるでつきり反対だ。何だか距離が縮まったみたいなのが錯覚を覚える。

これを機に本当に距離が縮まったら良かったんだけど、そういう雰囲気じゃなくなっちゃったから残念だ。

「……はあ。暢気なものね。……ここは直に戦場になるわよ？」

呆れたような声が背中越しに聞こえてくる。まるで僕の心の内を見透かしたかのような彼女の科白だ。

光のなかつた廊下に、雲の晴れ間からの月光が差し込む。

僕は立ち止まって振り向き、彼女と対峙した。

彼女の長い銀の髪は、月光を湛えて光り輝いている。

輝く眩しい白と、こちらをのぞき込む真っ暗な赤。

このまま絵画に閉じ込めてしまいたいような、そんな光景。

ああ、なんと神々しいのだろう。

ああ、なんと醜いのだろう。

僕が欲しいのは、こんなものじゃない。

「……まあ、そうだろうね」

「……なら、もつと用心することね。あなた、もういつ死んでもおかしくないわよ？」

「いや、僕は死なないさ」

「……はあ。どこからそんな自信が湧いてきたのかしら。あなた、もしかして自分だけは大丈夫だとも思っているの？ いい、厄災は

……」

「こんなにも僕のことを案じてくれる君がいるんだ。死ぬわけがない
や」

「……………」

彼女の表情が僅かに歪む。

神の設計した完璧が崩れる。

彼女の表面に張り付いた、造られた完璧の奥にある生身の彼女。

これだ。これを僕は救い出したいんだ。

「……………あなた、やつぱりおかしいわ……………」

「……………私は厄災を呼び寄せるの。……………私がいるから、みんな死んでいくのよ」

「あの時も、あの時も、みんな……………」

「……………あなたには、死んでほしくないの。だから……………」

ポロポロと音を立てて彼女の表層が剥離していく。

壁を隔てた先の、生身の人間がほのかに伝わってくる。

彼女は、本当に僕の身を案じてくれているのだと伝わってくる。だからこそ、僕に離れるように言うのだろう。

でも、彼女には悪いけれど、僕に離れる気はこれっぽっちもない。

好きなように生き、好きなように死ぬ。他人のことなど気にも留めず、ただ自分のために。

それが僕の生き方だ。彼女の気持ちなど知ったものか。

「嫌だ」

「……………」

「僕はスカジのことをまだ知り足りないんだ。こんなところで終わりでなんて勘弁だ」

まだ僕をしたいことの十分の一もできてないんだ。

「これから先、危険な目に合うことがあるかもしれない。だから頼む。僕を守ってくれ」

こんなに楽しいことが残ってるんだ、このまま死んだら死んでも死にきれない。

ただでさえ人手不足なんだ。厄災だか何だか知らないけれど、こん

な最高の人材に守ってもらわない手はない。

現状、一番信頼できる護衛はスカジなんだ。

「……本当に……それでいいの？」

彼女が戸惑いながらも問いかけてくる。その声は、ほんの僅かに震えていた。

そこに込められた意味が、僕にはよく分かった。そして、それと同じ時に確信した。

彼女はまだ救える。僕の見込んだとおりだ。

だから、返事は決まっている。

「ああ。僕は、スカジだからお願いしてるんだ」

僕の発した言葉が遠ざかっていき、沈黙が生まれる。

果たして彼女のうちにどんな感情が渦巻いているのか、僕にはわからない。

これは飽くまで僕の自己満足。頼まれもしないで勝手に手を伸ばし、勝手に腕をつかんでいるだけだ。

振り払われても仕方がない。

でも、もし彼女の中にほんの少しでも救われたいという気持ちがあるのならば――

「……そう。……わかったわ」

「……なら、相応の覚悟をしなさい。私と一緒に居るとするのは、そういうことよ」

「そっか。わかった」

僕は絶対にその腕を離さない。そのまま僕の“救い”へと導いてやる。

「……まったく、あなたという人は本当に頑固ね。……これじゃ私もう全力であなたを守るしかないじゃない」

呆れたような、嬉しそうな、そんな声色で彼女が呟いた。

ようやく寢床に入り、うとうとし始めた時だった。

ドアを蹴破るようにしてスカジが部屋に入ってくる。

「敵襲よー早くー！」

その怒鳴り声で意識を覚醒させた僕は、ベッドから飛び起きた。
懐の通信機を取り出して、警備班と連絡を試みる。

「状況は!?」

「現在応戦中！敵は武装した暴徒と思われる！少数につき、現状での撃退は可能！」

爆音と銃声混じりの声が応える。あまり時間の余裕はないとは思っていたけど、もう来るとは思わなかったなあ。

数が少ないことが不幸中の幸いか。

「そのまま現状を維持だ。増援も寄越す。後の指示は追って連絡する」

「了解！」

「ほら、行くわよー！」

一先ずどうにかなりそうなことを確認して、僕たちは作戦室へと向かった。

各地から情報が次々と集まってくる。

街のいたるところで武装した暴徒達が一斉蜂起したこと。その暴徒達が治安当局の駐屯所を次々と襲撃していること。入ってくる情報は、どれも芳しくないものばかりだ。

特に襲撃を受けた駐屯所から武器が持ち出されているというのがまずい。

段々と彼我の戦力差が埋まってきている。力で押さえつけられる限界は近い。

唯一のいいニュースは、治安当局本部が健在で、連絡路は確保されているということか。

状況は刻一刻と悪化している。

都市コントロールが奪われる前に事態を收拾するためにも、まずは情報を当局と共有するべきだろう。

「……よし。ここを撤退して、治安当局の本隊と合流する。狙撃オペレーターを殿に順次撤退だ！」

その一言で、皆があわただしく動き出す。

情報処理、通信などの後方要員が重装オペレーターとともにいち早く立ち退き、前衛、術師、先鋒が続く。

幸いにも敵の襲来はなく、残ったオペレーターと僕、そしてスカジは、無事に撤退することができた。

爆破処理された建物から吹き上がる噴煙が遠ざかっていくのを眺めながら思う。

この暴動を収めるには、もはや敵の頭を刈り取るしかない。

だが、それは本当にあるのだろうか。あつたとして、見つけられるのか。殺れるのか。

道のりは険しく、今はおぼろげにしか見出すことができない。

果たして、この暴動を収めることはできるのだろうか。

ドクターがスカジにくつつく話

「では、局長はこの状況を打開する策を何かお持ちで？」

「いや、しかし……………」

「何もないのならば、我々の指導を受け入れていただきたい」

「…………だ、だが、君たちは部外者だぞ！我々の…………」

「じゃあ、僕たちは帰らせてもらおうよ」

「は？」

「聞いていた話とはずいぶん違うみたいだし、これはもう契約の範囲外だ。じゃあ」

「ちよ、待ってくれ！」

「…………何か？」

「…………指導を受けよう。…………この街を守る手助けをしてくれ」

「…………わかりました。全力を尽くしましょう」

無事に脱出を果たし、治安当局本部でほかの人員との合流を果たした僕は、局長と面会をした。

期待していた情報については然したるものはなく、有力なものといえば暴徒の中かなり強力なアーツの使い手がいるということくらいだ。それについても詳細は不明で、ただ一撃で建物を文字通り潰したということしかわからない。期待外れもいいところだ。

それで、せめて戦術・戦略指導にかかわらせてほしいとお願いしたんだけど、これもなかなか手こずった。

局長が指揮系統への介入は認められないといって、なかなか首を縦に振ってくれなかったんだ。

それだけならわからなくもないんだけど、僕たちを使い潰す気満々なのは頂けない。

まあ、最終的には納得してくれたので良しとしよう。

さて、ここに来た目的は当局との情報共有だ。それは、何も今持っている情報をすり合わせるだけではない。

既にロドスの情報処理班には当局の諜報部と連携して動いてもらっている。

当局上層部のお粗末な現状把握とは裏腹に諜報部員の能力は高く、優秀な人材が多いとの印象を受ける。

ただ、肝心の諜報網の方がかなり打撃を受けていた。聞くと、こちらのエージェントとして不穏分子に送り込んでいた感染者の協力者の多くが向こうに取り込まれているらしい。実態もつかめないというのが実情だ。

不幸中の幸いとして、まだある程度は信頼できるエージェントが存在しているということか。

とにかく、情報を集めるしかない。

実戦部隊の一部には、治安部隊の対感染者戦闘を指導してもらっている。

僕のほうも幹部クラスに戦術指導を行った。その甲斐もあってか、戦力の結集と防衛線の構築に成功しつつある。

都市インフラも今のところは無事だ。少なくとも数の防衛部隊が居るし、防衛設備も強固だ。

ここの初動だけはどうにか間に合っていたのが幸いだった。

状況は膠着しつつある。

こっちの方が装備は整っているし、戦力的にも上だといっている。しかし、暴徒を叩き潰せるかといわれたらそれは無理だ。そこまでの優位はない。

一方、暴徒のほうも攻勢をかけるほどの戦力はない。防衛線が構築された今、攻撃は無謀すぎる。

ただ、その無謀に走らないというのがかえって不気味でもある。まるで統率された軍隊だ。

持久戦となればこちらが有利だ。援軍もやってくるし、物資の面でも優位にある。

それは暴徒側もわかっているはずだし、だからこそがむしろに攻勢をかけてくると思っていた。

長引けば士気も落ちるし、集団が自壊しかねない。だからこそ、短

期決戦こそが唯一の勝ち筋のはずだ。

だというのに、暴徒達の士気が落ちる気配はない。むしろこの状況を望んでいたかのように活気づいている。

一見うまくいっているというのに、つかめない指導者の所在と暴徒達の様子がのどに刺さった小骨のように安堵しようとする心をつつく。周囲の雰囲気や和らいでいく中、僕だけがどうにもその空気に馴染めない。

……いや、僕だけじゃなかった。もう一人いる。このぬるい空気に馴染めずにいるのが。

「……スカジ。少し話をしないかい？」

「……ええ。ここじゃ何だし、一先ず出るわよ」

言葉に続いて廊下に出ていくスカジ。僕もその後を追って、周りに気づかれぬようにそつと部屋を抜け出した。

先ほどまでは打って変わって、空気は刺すように冷たい。ただ、今は却ってそれが心地いい。

「……で、話っているのは何かしら？」

「……暴徒達のことだよ。追い詰められてるのは明らかにあつちなのに、様子がおかしい」

「……なんだか嬉しそうな、楽しそうな感じだ。理解できないね」

「……あなたがそれを言うかしら……」

呆れた様子で彼女が言う。どうやら何か勘違いされているようだ。別に僕はマゾヒストな訳じゃない。

「いやいや、さすがに僕もただ追い詰められて楽しくはならないよ」

僕はただ、他の人ができそうにない難事をやってのけて得ることのできるあの快感を想像していい気分になるだけだ。……どうにもならない時は愉快でも何でもない。全くもって。

「……そう。まあいいわ。ただ、私に聞かれたところで分かるわけないじゃない。何で私にそんな話を？」

「いや、あの部屋の中で僕以外にはスカジだけがあの空気に馴染んでなかったからね」

「……そうね。ああいう空気は苦手だわ。安堵、歓喜。みんな私とは無縁のものだもの……」

……そうか！

頭の先からつま先まで、雷に打たれたかのような衝撃を受ける。

暴徒、士気、愉悦、安堵、歓喜。複雑に絡み合った歯車が、音を立てて噛み合っていく。

興奮した僕は、思わず彼女の手を取って口走った。

「スカジ、ありがとう！」

「なっ……！」

「おかげで分かったかもしれない！」

「〜〜！」

彼女は何が何やらわからないといった様子で口をパクパクしている。

一先ず彼女のことは置いておいて、僕は部屋へと駆け込んだ。

そうだ。この空気。安堵、歓喜。奴らの間の空気感は、この部屋の空気感なんだ。

ただ追い詰められて喜ぶ奴なんて世の中そう多くはない。何かしらの勝算が見えていないところはならないはずだ。まさに今の僕たちのように。

恐らく、暴徒達の狙いはこの膠着状態それ自体だ。だからこそ目標を達成して士気は高いし、安堵と歓喜が奴らの間に広がっているんだろう。

膠着状態に陥ったことによって、僕たちも暴徒達も下手に動けなくなつた。

そこで、長期戦となれば明らかに有利という状況がこちらの思考を鈍らせた。

敵の意図したこの状況を、僕らは今まさに受け入れようとしているのだ。

ここで、情報にあった敵のーツ使いが出てくる。

なぜ奴は姿を現さない？ 詳細不明ながらも、その破壊力は複数の方面から伝わっている以上本物のはずだ。

今僕らが敵を抑え込んでいるのも、そいつがいなかったからに他ならない。

では、そのアーツ使いはどこにいるのか。答えはただ一つだ。

そいつこそが暴徒達の用意した勝ち筋なんだ。戦力を保持しながらも運用できない状況に陥った僕たちに、致命的な一撃を叩き込むための。

暴徒の大群は単なる囹。少数精鋭によつて都市の最重要地点を襲撃する。

なんて大胆な作戦だろう。こいつを考えた奴はよほどの切れ者か大馬鹿かのどちらかだ。

しかし、ともすれば見殺しにもされかねない作戦を暴徒もよく飲んだものだ。

もしかすると、この作戦を立てた奴こそが指導者、そして件のアーツ使いなのかもしれない。

まあ、今となつてはあまり重要ではない話だけれど。

さて、もしことが僕の推測通りだった場合、問題となるのはどこが狙われるかだ。

行政府なんかは象徴的な意味合いは絶大だが、精神的な効果以外は薄い。

奴らの目的が名をあげることなら候補だが、ここまでの動きを見るにその線は薄いだらう。

そうだ、目的。奴らの目的とはいったい何だろう。

ここまでの行動を見るに、奴らは明確に都市を取りにきている。

単なるフラストレーションの爆発や、当局への抗議なんて生易しいものじゃあない。

そう考えると、やはりこの都市を感染者達のものにする、自分たちの国を創るといったところだろうか。

そうだとすれば、やはり都市インフラかな？でも、それで今後のまますます開いていく戦力差までどうにかできるとは思えないし、明確な致命傷ではない。

そもそも、ここには一般市民が大量にいるんだ。自分たちの国を作

るって言ったって、それをどうするのだろうか？

追い出そうとしても、はいそうですかと大人しく出ていくばかりではないことは容易に想像がつく。

そんなことをしていたら、続々と他都市から増援が到着しておしまいだ。

もつと致命的な、増援云々の次元ではないところに話を持っていくような場所……。

「あの、ドクター」

頭を抱えてうなる僕に、通信班のオペレーターが声をかけてきた。

いい機会だと思いを中断し、応対する。

「ん？なんだい？」

「ケルシー先生からの連絡なんですけど、1、2ヶ月のうちにこのエリアで天災が発生するだろうとのことですよ」

「天災が？……いやいや、さすがにそこまではかかりませんよ、ケルシー先生……」

そりや大変だけど、さすがにそこまで長引くとは思えないし、そうになったら勝ちほもはや決まっている。

移動都市なんだし、移動すればいいだけの話だ。

しかし、なんで今そんなことを……まあ、本題ではないだろうけど。

「……それで、本題は？たぶん援軍のことだろうと思うけど」

「……ええと、追伸、精々頑張って早く帰ってこい。話したいことがある……だそうです」

「……」

「……」

「……わかった。ありがとう」

本当にあの人は何を考えているんだろうか。昔からよくわからなるところがあつたけど、今もよくわからない。

……いや、今のほうがもつとわからないか。

まあいい。天災が来るならロドスも早いことこのエリアを脱出しなきゃならないだろうし、ようは発破をかけられているのだ。きつとそういうことだろう。ようはあの人なりの励ました。

……そういうことにでもしとかなきゃやってられない。

「……でも、今天災が発生したらどうするんでしょうか？」

ふと、先ほどのオペレーターが呟く。

「まあ、どうにか動かすだけうぐ……」

……そうだ。もし、移動都市が動けなくなったら？

都市を動かす巨大な源石エンジン。あれを壊されたらどうなる？

移動できない都市。それは、いつ爆発するかもわからない時限爆弾のようなものだ。

破壊されたエンジンを直そうにも、同じ規模の都市を作り直した方がマシなほどの莫大なコストがかかる。

そうなれば、皆この都市を出ていく。都市は放棄される。

それこそが、奴らの国なんだ。

一時間後、僕は選りすぐりのオペレーター達とブリーフィングを開いていた。

防衛の必要はある以上、あまり多くのオペレーターを動かすわけにはいかない。

もどかしさはあるが、できる限りの精兵を選んだつもりだ。

それに、局長とも掛け合い、防衛線に影響の出ないギリギリの人員をこちらに割いてもらえることにもなった。

彼らのバックアップのおかげで、取れる作戦の幅が広がったのは大きい。

「よし、それじゃあ作戦を説明する」

作戦自体は非常にシンプルだ。身体能力に優れるオペレーター達によって、ビル伝いに都市の心臓部を目指す。

先回り出来れば敵を迎え撃ち、そうでなければ敵を追う。目標は敵の最大戦力、アーツ使いただ一人だ。

後続部隊によってそれ以外の敵は受け持つことで、近接高速戦闘に持ち込む。

大威力のアーツ使いを相手するには、この手に限る。

僕のほうも、現場に向かうことになる。

心臓部が地下空間にある以上、僕もその場に居合わせないと連絡が取れなくなる可能性がある。

地下はかなり入り組んでいるらしく、同士討ちは避けたい。

そのためにも、ドローン運用による状況確認と情報処理は必須だ。

そういうわけで、僕と情報班から数名が作戦に参加することになる。

僕らの移動はどうするんだっていう話だけれど、その辺も抜かりはない。

こんなことになるなんて、スカジが護衛についてくれて本当に良かった。

ブリーフィングを終え、各自準備も完了した。いよいよ作戦開始だ。

「……ねえ」

「どうした？」

スカジが目を伏せながら訪ねてくる。さっきからずっとこんな調子だ。

いつものこちらをじっと見つめてくる彼女はどこへ行ってしまったのか。

しおらしい様子で尋ねてくる。

「……本当にそれをやらなきゃいけないのかしら」

「……そうでもしなきゃ、僕らはどうしようもないからね」

「でも……」

そうこうしているうちに、次々とオペレーター達が飛び立つ。

作戦の遂行上、これはどうしても致し方ないことだ。

彼女には申し訳ないけど、少し強硬手段に出させてもらおう。

「……………ごめんー!」

そう一声かけて、僕は彼女の背中に飛び乗った。

「あっ……………」

要はおんぶして連れて行ってもらおうということだ。情けないことに、大した移動手段のない僕たちはこうしてもらわないと作戦に参加できない。

「頼む、スカジ！行くぞー！」

「ち、近いわ！……こういうのには、慣れてないの」

「スカジ！」

「……ああ、もう！」

彼女も腹をくくったのか、ようやく僕とスカジも飛び立つ。

と、すぐ感じる強烈な浮遊感。胃が上下に無茶苦茶にされるような、ゲツソリとする感覚。

周りの風景なんかは目をやったら、たぶん僕は正気でいられなくなる。目の前だけを見つめよう。

目の前に広がるのは、彼女の長い銀髪。回した手をなぞる銀糸はサラサラで、すぐくきれいだ……

「ちよ、ちよつと黙ってなさいー！」

彼女が叫ぶ。抱き着いた背中から感じる熱が、少し高くなつた気がした。

どうやら僕は、何か彼女の気に障ることを口走ってしまったらしい。

余計なことを考えるのはやめて、僕はただ無心に彼女にしがみついた。

ドクターがスカジに抱きしめられる話

燃え盛る街の空を駆けて行く。

僕たちは炎と煙、暴徒達の異様な熱狂に包まれたエリアから少しずつ離れていった。そのうち、街の雰囲気は少しずつ変わっていく。うだるような暑さは消え去り、辺りは人ひとり見当たらない異様な寒々しさに覆われていく。先ほどまでの熱気も嫌だったけれど、今の刺すような空気のほうがより不気味で、すごく嫌な感覚だ。だけれども、この感覚こそが僕の仮設が正しいということを裏付けているような気がする。スカジの背に掴まりながら、僕は寒さに身を震わせた。

やがて、目標が見えてくる。周囲の建物は粉々に破壊されている中、地下の心臓部への入り口だけが無事だった。恐らく、敵はもうここに着いているのだろう。最早一刻の猶予もない。そう考えた僕が、突入の指示を出そうとしたその時だった。そいつが現れたのは。

異様な雰囲気の中の男だった。ぼろぼろの服にマントを羽織ったみすぼらしい姿。だというのに、外見には似てもつかないような強烈な威圧感をそいつは放っていた。

呆気にとられるオペレーター達を気にも留めず、そいつは柔らかな笑みを浮かべながらゆっくりと近づいてくる。

「ようこそ、ロドスの諸君。……先ずは話でもしようか」

「っ！前衛、相手を頼む！後方要員は撤退！」

間髪入れずに指示を出す。その言葉に従ってオペレーター達は一斉に動いた。多少のイレギュラーがあつたとはいえ、さすがはロドスの精鋭。戦闘要員が敵に襲い掛かり、僕たち非戦闘員は驚くべきスピードでその場から離れていく。去り際に、やつが小さくつぶやくのが見えた。

「……つれないね」

後方で体勢を立て直した僕たちは、様子を見るためにドローンを飛ばした。僕もこれまででなかなかの修羅場を潜り抜けてきたと自負しているけど、あそこまでの圧迫感はずいぶん。生の実感ってやつを存分

に味わうことができるのは。こっちは三人、あつちは一人。数の上じや圧倒的だし、それも精鋭ぞろい。普通ならばとつくに蹴りはついている。だけれども、僕には確かな確信があった。

ドローンのカメラが戦場の様子を送ってくる。辺りにはもうもうと土煙が立ち込め、詳しい様子がわからない。しかし、その中で動く人影を見つけた。やはり戦闘は続いているらしい。

と、突如として映像が途切れる。どうやらドローンを墜とされたようだ。敵は遠距離攻撃を使うらしい。だが、先ほどまでの映像では前衛オペレーターの近接高速戦闘を捌き切っているようだったし、そもそもそんな状況でどうやってドローンを発見したのか。敵の能力は未だに謎に包まれている。かなりまずい状況だ。さつき僕たちを運んだスカジと護衛を除く二人が新たに加わったとはいえ、ただゴリ押しするのはあまりにも危険すぎる。何か敵の情報を得られるような、そんな一手が欲しい。取りあえずは、目を手に入れるべきだろう。「スカジ、少し頼みたいことがある」

スカジに連れられて、僕はまだ無事なビルの屋上へと降り立った。ここからならば、戦っている様子が多少なりとも見える。双眼鏡から見える景色には依然として辺りには砂埃が立ち込め、敵の姿もオペレーターの姿もおぼつかない。がしかし、どうやら攻めあぐねているらしいことはわかる。うっすらと見える輪郭にほとんど動きがないことがその証左だ。

戦闘が小康状態になった所で、僕はオペレーターに連絡を入れた。

「状況はどうなってる?」

「ドクター……ううん、あんまりいいとは言えないかな」

「敵の能力については何かわかったか?」

「うーん、ずっと砂埃がひどくてよくわからないよ。突撃しても躲されちゃうし」

やはりそれが問題みたいだ。視界が悪いせいでどうにも情報が掴めない。不幸中の幸いとしては、それで一方的に敵から攻撃されることにはなっていないということか。そこまでの余裕がないのか、はた

また……

そこまで考えたとき、先程の奴の言葉が脳裏をよぎる。あいつは僕たちがロドスだということを知っているようだった。その上で話をしようとも言っていた。打つべき一手はこれかもしれない。

「通信機を敵に寄越してやってくれ。予備を取りにこつちに退いてもらうていい」

「ええ!? ドクター、どういう事?」

「考えがあるってことだよ。さ、早く」

「了解!」

その返事を聞いた僕は、他のオペレーターたちにも距離を取るように伝える。果たして敵が応じるかどうか。奇妙な沈黙が続く。

破ったのは、やはり敵の一声だった。

「やあ、ドクター。会えてうれしいよ」

通信機越しに声が聞こえてくるとともに、舞っていた砂埃が吹き飛ぶ。あれが奴の能力なのか。

「どうも、初めまして。ええと……」

「名前なんぞ私にはないさ。……それに初めましてでもない」

僕としては見覚えがないのだけれど、どうやら初対面ではないらしい。まあ、昔は色々とふらふらしていたし、その時にでもあったのかな?

「それは失礼。……して、話とは?」

「……私のアーツは土砂の操作。予めマーキングした土砂を自在に操ることができる」

「?」

「操作できるのは私を中心に半径3km、操作限界重量は……まあ、やってみた限りは青天井というところだ」

こいつは何を言っているんだろうか。聞きもしないのに自分の情報を言うとは。聞いた限りでは大層な能力だが……欺瞞だろうか。

「ふふ……嘘じゃあない。どうだい、なかなか素晴らしい、イカれた能力だとは思わないかね?」

「本当だとすれば大層なアーツだ。……でも普通じゃ有り得ない」

そう答えた瞬間、双眼鏡の先の奴の横顔がニヤリとその姿を歪めた。

ゾクリ、と。嫌な汗が噴き出してくる。……そうか。ケルシー先生が伝言なんてしたのはこういうことだったのか。

「……ドクター？」

となりのスカジが怪訝な表情でこちらをのぞき込んでくる。僕の動揺は彼女からも見て取れるようなものだったらしい。何でもない と答え、汗をぬぐう。

「……そう。普通じゃない。こんな、体内に源石を詰められて、なお生きながらえているというのはね。君とケルシーのおかげだよ」

「……なるほどね。そういうことだったのか」

「そうとも。……ああ、いや、別に君たちのことを恨んでなんかはないさ。むしろ今は感謝している」

こいつの正体はわかった。あの威圧感はそういうことだったのか。

「……なぜ暴動を？」

「……感染者に人権はない。……人として扱ってもらえないんだよ」

「……そのためのロドスだ」

「ロドス！ああ、そうだね。私も知ったときは驚いたものだ。だが納得もした。君がいたからね」

男は相も変わらず、飄々と話し続ける。

「君たちの志は立派なものだ。感染者と非感染者の共存。そうなったらどんなに素晴らしいものか。私だってそう思っているよ」

「……」

「でもね、私たちが欲しいのは今なんだよ。今、人らしく生きたい。未来に生きてる君たちとは違ってね」

ふと、男がうつむく。再び顔を上げたとき、男の顔には先ほどとは打って変わって自嘲が満ちていた。

「……まあ、もはや人と言えるかどうかもわからない私が言うことでもないか」

ちくり、と。胸を刺す痛みを無視せずにはいられない。心の奥底にしまったはずのものが顔を出そうとする。

ちらりと隣にいるスカジを見る。

「そうだ。僕は救いを与えるんだ。相手の望む望まぬにかかわらず。エゴを押し通すんだ。」

「……いや、むしろだからこそ、まだ人である皆のために国を作ってやりたかったのかもしれないな」

「どうだい、ロドス。これが私たちだよ。ただひっそりと、普通に生きていただけなんだ。放っておいてはくれないか?」

そう言っただけの話は終わった。

奴は犠牲者だ。それは間違いない。いや、奴だけではなく感染者とこののは得てして犠牲者なのだ。

救われたかったのだろう。みんな。

でも、だからといって暴虐を見過ごすわけにはいかない。この暴動を止めないわけにはいかない。

だから――

「……それは無理だ。お前たちは暴動を起こした。無関係の多くの人を巻き込んで。だから、それを止めるのが僕の仕事だ」

もう僕にはこういう救いしか与えることができない。押し付けることしかできない。

「……そうかい、ドクター。残念だ」

その言葉とともに、大地が揺れ動く。周囲の破壊されたビルの瓦礫が奴に向かって集まっていく。

振動が収まったとき、そこには天を衝く土塊の巨人がいた。

「ゴーレム、とでも言おうか。どうだい、すごいものだろうか?」

通信機から奴の声が聞こえる。どこか誇らしげな、どこか悲しげな、そんな奇妙な声色。けれども、そんなものは右から左へと流れていく。目の前に現れた巨体に意識を持っていかれる。呆然と見上げるだけの僕はの前で、巨人が腕を振り上げ――次の瞬間、大地が割れた。

圧倒的な破壊力。大質量の通過で辺りには突風が吹きすさび、粉塵を舞い上げる。

「ドクター……あれ、危険すぎるよ!ひとまず退かないと……!」

オペレーターの悲鳴のような叫びがきこえる。でも僕は何も返事を返せなかった。頭が真っ白になる。なんだ、あの化け物は。ビルすら見下ろすような奴だなんて、どうすれば……

「私に任せなさい。化け物退治には慣れているわ」

それが聞こえてきたのはすぐ隣からだ。スカジが、事もなげに言っただけ。その一言で、凍り付いた思考が再び動き出した。

「……いけるのか」

「ええ。履歴書にもあったでしょう？あれは私の獲物よ」

じつとスカジの眼を見つめる。見つめ返してくる深紅の瞳はまっすぐで、どこか誇らしそうにしていた。

「……よし。スカジ、頼む。あの巨人を倒してくれ！」

「了解！」

そうして彼女は飛び立つ。僕はオペレーターたちに通信を入れた。

「みんな、聞こえるか」

「ドクター!?!どうするの……」

不思議な気持ちだ。さつきまであんなにどうしようもなく感じていたのに、今ではすっかり変わってしまった。この不思議な高揚感は果たして勝利の確信からくるものなのか、彼女の瞳にあるもの見たからなのか、それはわからない。けれども、ただ一つ言えることは

「大丈夫だ。心配ない。彼女がいる」

あの巨人に対して、彼女はあまりにも小さい。さながら、僕たちと蟻の関係のように。

けれども、飛びかかる彼女の背中はとても大きく、頼もしく見えた。彼女が大きく剣を振りかぶる。ようやく気付いたのか、巨人がこちらを振り向き、そのままの勢いで腕を振るう。

襲い掛かる大質量。凄まじい速度のそれは、莫大の運動エネルギーを湛えて彼女に向かっていき——拳から肩口まで、真っ二つにスライスされた。

「!?!」

通信機から息を?む音が聞こえる。思考に生じた一瞬の空白。奴

の制御から逃れた瓦礫を足場に、彼女は加速する。瓦礫が碎けるほどの踏み込みから高く舞い上がり、巨人の頭上に達した彼女は体を回転させ、その勢いと全身の力を余すことなく剣に蓄える。

「行けー」

我を忘れて叫んだ。僕も、オペレーターたちも、誰もが。

その叫びを背に受け、大剣が振り下ろされる。脳天から股座まで、正中線を斬撃が貫き——土塊の巨人は、思い出したかのように元の瓦礫へと戻った。

「……やった」

誰かがそうつぶやく。

次の瞬間、誰もが口々に叫ぶ。

「やったー」

歓喜の輪が広がっていく。そして、その中心にいるのはスカジだ。ずっと孤独に過ごしてきた彼女が、今こうして皆と歓喜を分かち合っている。果たして、彼女はどんな顔をしているのだろうか？戸惑っているのだろうか、それとも少し照れてはにかんでいるのだろうか。ここからではその表情はわからない。双眼鏡を使えば見えるが、そんな野暮な真似をする気はなかった。

屋上で一人、寝転がる。アーツが消えたということは、その使い手の命脈も断たれたのだろう。

これが僕の与えることのできる唯一の救いだ。

……死という救い。これもエゴなのだろう。自分の都合で時には命を救い、時には死を与える。罪深い人間だと思う。

でも、僕がこうして生きているということは、まだ僕は人を救うことができているのだろう。

僕はその事実で満足覚え、また嬉しく、誇らしくも思った。

「……患者はさ……治……後の……活はどうでも……てさ、ただ……お医者さんに治して……救って欲しいだけなんだ」

「!？」

置かれた通信機から、雑音混じりの声が聞こえてくる。

「……だから……クター、私を救ってくれてありがとう」

「……それと……これは私……のプレ……トだ。……もう……君も疲……だろうか？」

直後、轟音とともに足元が砕け散る。

猛烈な浮遊感とともに、意識が薄れていく。これが死の間際という奴なのか。

脳裏を走馬燈が駆ける様子はない。ただ浮かんだのは、これで終わるかという気持ち。

結構な人を救ってきたと思う。生きる意味を全うできたという達成感。もう救わなくてもいいのかという残念さ。開放感？なのだろうか、これは。

まあ、終わりということはそのうちのことだ。もう世界に僕の生きる意味は残っていないのだろう。

……だというのに、この心残りはなんなのだろうか。暗闇に銀糸が瞬き、僕の意識はそこで絶えた。

「……クター……ドクター……」

誰かが僕のことを呼んでいるような気がする。

「ドクター！目を覚まさない！」

どこかで聞いたような、聞いたかったような、そんな声。

「……どうして」

「あなたには……死んでほしく……なかったのに……」

震える何かが僕の頬を撫でる。それは冷たくて、けれどどこか温かい。

「あなたには……」

その温かさが、僕の凍り付いた四肢を、脳みそを、溶かしていく。その肌の触れ合いが、僕という存在をこの世界に繋ぎ止める糸となる。

そうだ。僕はまだ生きる意味を全うできちやいない。まだ救いたい、救わなきゃいけない人が残っている。

あの銀糸は、あの深紅の瞳は、未だに僕の脳裏にしつかりと焼き付いている。

だから、僕はその名前を口にする。

「……ス……カ……ジ……」

「……っ！」

視界が開けていく。飛び込んできたのは彼女の姿。霞んだ景色の中でもわかる、その姿。

ぼやけてしまつて表情はよくわからない。ここが夢か現か、それすらも定かではない。

でも、抱きしめられた腕の中で感じた彼女の熱は、ここが現実なんだと、僕はまだ生きているんだと、そう教えてくれた。

ドクターがロドスに帰ってきた話

僕が気を失っていたのは、ほんの短い間のことだったらしい。

奴の最後の一撃でビルが崩れ去るその瞬間、スカジは飛び出していった。

歓喜に浸っていた周りのオペレーター達は何が何だかわからなかったようだ。

それもそうだろう、あんなでかい奴を相手にしたことがあるオペレーターはそうそういない。それを倒したんだから、気が緩むのも仕方がないというものだ。

ある意味このような状況に慣れている彼女だからこそ、動くことができたのだろう。

そうして飛び出した彼女が見つけたのは、瓦礫とともに落下している血まみれの僕の姿だった。

間一髪で彼女が受け止めてくれたおかげで僕はこうして生きているわけだけれど、もし間に合わなければ間違いなく死んでいただろう。

そうして彼女の腕の中に納まった僕は当然ながら気を失っていた。しかも、落ち方が悪かったのか、額をぎつくりと切ってしまっていたため、額から血を垂れ流して気を失っているという、傍から見れば大変に危険な状態に陥っているように思われたのだろう。

やがて、他のオペレーター達もスカジに追いつき、その光景を目の当たりにしたことで、もう集団でパニック状態だ。僕が目覚ましたのは、そんな喧噪の最中のことだった。

目を覚ましてからしばらく意識が定まらなかつた僕が最初に知覚したのは、スカジに力いっぱい抱きしめられているということだった。その赤い瞳に雫を湛えつつ、こちらを非難するような、心の底からほっとしたような、一言では言い表せないような何もかもがちや混ぜになった表情でこちらをのぞき込んでいる。

僕は、なぜだか無性に嬉しかった。

それから先はもう大変だ。僕が目を覚ましたことに気づいたオペレーター達が騒ぎするし、額の傷の手当だ検査だどてんやわんやしていた。

そんな騒がしい中でも、スカジは僕のそばを片時も離れようとしなかった。護衛としての役割を果たせなかった責任でも感じているのだろうか。尋ねてみようとも思ったがお互いに何と無く気まずく、結局口を利くことのないまま、淡々と事後処理を進めていった。

しばらくすると後続の治安部隊も無事に到着し、暴動の終息への道筋もたつてきた。僕の仕事は残すところあと一つ、報告書作成といったところだろう。そんな訳で、当局との話し合いの結果、負傷のこともあって、人員は残したまま僕は一足早くロドスに戻ることとなった。額の傷は単なる切り傷で、特に重症ではないとは思われるが、念のため検査をきちんとしておこうということだ。

そうして僕は、ようやくロドスに帰ってくることでできたのだった。

「ドクター！お帰りなさい！」

車から降りた瞬間、久しぶりのかわいらしい声が聞こえてくる。久しぶり、といつてもつい数日前に聞いたばかりなのだが、あまりに密度の濃い異常な日々を過ごしてきた僕にとっては本当に久しぶりの日常が帰ってきたという感じだ。

下向きの頭を起すと、その視線の先にはひよこひよここと耳を振る小柄な少女、アーミヤがいた。

「ただいま、アーミヤ。なんだが随分と会ってなかったような気分だよ」

「私も、ドクターが無事に帰ってくるか心配で……ドクター、その頭、何ですか？」

アーミヤの目が細められる。どうやら彼女は、フードの隙間から巻かれた包帯を目ざとく発見したらしい。

心配をかけないように隠していたんだけど、やっぱりアーミヤの

目は欺けないようだ。

「いや、ほんのちよつとした切り傷だよ。そんな騒ぐようなものじゃ……」

「……………はい。用意のほうをお願いします。最優先で……………はい」

「ドクター。今すぐ検査しましょう」

「……………いや、だから大した……」

「ドクター？」

「あつ、はい」

…どうにも僕はアーミヤに弱いみたいだ。彼女の言葉にはどうにも逆らえない。

…本気で僕のことを案じてくれているのが伝わるから、というわけではない。アーミヤ以外でもそう思ってくれている人はいるし、僕もそれを感じ取れないほど鈍くはない。

けれども、僕は自分の欲望の赴くままに行動するし、そのためにはそのような思いも平気で無下に出来るようなひどい人間だ。だから、僕がアーミヤの言葉に逆らえないのは、もっと違う何かがあるからだ。

その何かのせいで、僕は度々甘えてしまう。彼女の優しさに。縋ってしまふんだ。

「ドクター？…行きますよ？…ほら」

言葉とともに手が差し出される。年相応の女の子らしい小さな手。僕はこれまで、こんなにも小さな手に縋ってきた。…そして、きつとこれからもそうなのだろう。

差し出された手を取る。アーミヤは、僕の手を逃がすまいとギュッと握り締め、少しはにかんだ。

そんな彼女を見て湧き上がってきた感情の名前を、僕は知らない。

…でも、ひとつわかることがある。

つないだ手から伝わる温かさは、僕には過ぎたるものだということだ。

「ドクター！もう金輪際こんな危ないことはしないで下さい！」

診療室への道すがら、僕はアーミヤに今回の出来事を根掘り葉掘り尋ねられていた。

適当にはぐらかして答えようとしたんだけど、結局は洗いざらいしゃべらされてしまい、結果は御覧の通りだ。こうなることが目に見えていたからごまかそうとしたんだけど、徒労に終わってしまった。

「ドクター？ちゃんと聞いてますか！」

「いや、でも仕事で…」

迫力に押されてたじたじになりながらも、何か言い訳めいたことを口走る。

言った瞬間、しまった、と思った。

アーミヤが俯き、肩を震わせているのが目に入る。僕は火を覚悟した。

「……心配だから言ってるんです」

「…ドクター。あんまり無茶なこと、しないで下さい……！」

「……ごめん。ごめん、アーミヤ」

「……ドクター。少し……いいですか？」

「あ、ああ」

胸に飛び込んだきたアーミヤを恐る恐る抱きしめる。ガラス細工を扱うがごとく、そつと。

そうでもしないと、その華奢な身体を傷つけてしまうような気がした。

彼女が、胸の中で小さく震えるのを感じる。その振動が伝わったかのように、心に波が立ち始めた。

やってしまった。傷つけてしまった。そんな苦々しさが沈殿して積もっていく。

でも、僕はそれを態度には出さない。出してはならない。

僕はそういうものを踏みつぶしてここまで歩いてきた。そうでもないかと、僕は僕でいられなくなる。

とても生きてなんかいけなくなる。

だから、僕は努めて優しい声で語りかけた。

「……本当にごめん、アーミヤ。もうこんな危ない真似はしない。約束するよ」

「……」

「?今……」

「約束ですよ、ドクター」

「……ああ」

「……そういうのは後にしてくれないかしら」

背後から、僅かに怒気を含んだ声が投げかけられる。

そこには——というか、最初からいたのだけれど——スカジが立っていた。

ロドスについてからもまだ彼女とは口をきいていなかった。流石にロドス内で誰かに襲われるようなことはないと思うんだけど、彼女はいまだに僕の護衛として付いてきていたのだ。

……やはり、この前のことで何か負い目のようなものを感じてしまっているのだろうか。結局無事だったわけだし、むしろ彼女がいなければ死んでいたのだから、僕としては誇りこそすれそうまで気に病むことではないと思うんだけど、彼女にとってはそうではないらしい。

そんな訳で、先ほどの一言が久しぶりに聞く彼女の声というわけだ。

「……—……なんでもないわ。気にしないで」

「……?」

何なんだろう。さっきは少し怒っていたのに、今度はまた何か悩んでいるような様子だ。

やはり何か声をかけるべきなんだとは思う。だけれども、何といえればいいのかわからないし、僕のことでは何か思うところがあるのなら、余計に收拾がつかなくなってしまう。

そうやって僕が行動しかねているところで、アーミヤが動いた。

「スカジさん、ドクターを助けてくれてありがとうございます」

「……私は……」

「本当に、ありがとうございました」

そう言つて深々と頭を下げるアーミヤ。

いい機会だと、僕も彼女に声をかける。

「スカジ、僕からもちやんとお礼を言わせてほしい」

「……今、僕がこうしていただけるのも全部スカジのおかげだ」

「……」

「……もしかしたら、自分のせいで僕が危ない目にあつたなんて思つてるかもしれないけれど、そんな事はない」

「あの敵は僕が呼び寄せたようなものだ。スカジがいてもいなくても、僕はいつと戦うことになつていたと思う」

「でも、もしあの場に君がいなかったら、僕はあのまま死んでいた。他のオペレーター達だつてそうだ」

「スカジが僕のことを、みんなのことを、救つてくれた。救つてくれたんだ」

「だから……本当に……ありがとう、スカジ」

「……私は……はあ……わかつた。素直に褒め言葉を受け取つておくわ」

一見すると不承不承といった様子の彼女ではあるが、よく見るとどことなく嬉しそうな様子だ。

僕の眼力が上がってきたからかもしれないけれど、彼女は案外感情が顔に出やすい気がする。

態度で勘違いされていただけで、実際は表情豊かな人だということもつい最近知つたことだ。

彼女の心は死んでいるわけではない。ただ、少しばかり臆病に縮こまつてしまつていただけだ。

今からでもまだ間に合う。彼女はまだ、柔らかく、暖かな部分を失つていないのだから。

彼女がそれを、温もりを取り戻せたとき、僕は彼女を救えたということになるのだろう。

久しぶりに見た彼女のそんな表情に、僕は改めてそう思った。

「……ドクター。行きますよ」

……今度はなんでこつちが不機嫌なんだろうか？

まったく、年頃の女の子の考えることはよくわからない。

検査も無事に終わり、異常なしという結果が出た。

というわけで、僕は今報告書作成に取り組んでいる。

現地からの情報もあつて、今回の暴動は相当周到に計画されたものだったということが段々と分かってきた。

中心にいたのはやはり奴。あの圧倒的なアーツの力であれだけの感染者たちをまとめ上げた。

こちらにとつて幸いだったのは、余りにも奴一人に依存した組織だったということだろう。

もし、奴のほかにいわゆる幹部クラスの人材が複数いれば、もっと被害は大きくなっていたはずだ。

アーツの強大さというのは、それ自体がある種のカリスマを帯びる。今後、より強力なアーツの使い手が現れば、今回と同じようにその力に引き寄せられて組織が形成されていく可能性は高い。

それが複数集まれば、それはもう立派な脅威だ。このような組織の早期摘発は、ロドスにとつて今後の重大な課題となっていくことは間違いないだろう。

……あいつのような存在がこの世界にはまだいるはずなのだから。

そんな思考を中断したのは、ノックの音だった。

「ドクター？」

外から声が聞こえる。僕は返事をして、中に入ってくるように声を掛けた。

やってきたのはアーミヤだった。何でも、先生が僕のことを呼んで

いるらしい。

帰ってきたら話をするといっていたから、多分それだろう。

先生の部屋をノックすると、入れ、と一言声がかけられた。僕も失礼します、と形式ばった返事を返し、部屋の中に入る。

「先生、話というのは何でしょうか」

僕がそう切り出すと、先生は何か面白いものを見るかのような顔をして言った。

「何、今回はなかなか愉快的な目にあつたらしいな」

「からかうのはよしてください。こっちは大変だったんですよ」

「……それに、随分と仲良くなったそうじゃないか」

先生が目を細める。僕は先生が何を言いたいのかいまちよくわからなかった。こんな話をするためにわざわざ呼んだとは考えられない。はぐらかすような態度の先生を、僕は問いただすことにした。

「先生。冗談はその辺にしておいて、本題に入りましょう。いったい何の用ですか？」

「……………」

「やはりあのアーツ使用のことですか？先生はあの事を知っていたんですか？」

「……………」

「……先生。何とか言ってください」

「……あの女…スカジに深入りするのはやめておけ」

「……………」

思わず呆けた声が出てしまう。スカジに深入りするな？いったいどういうことなんだ？

「あれはお前の手に負えるようものではない。生半可な気持ちで立ち入る問題ではないということだ」

「……先生は僕のことをよくご存じでしょう。それで僕が手を引くだけでもっ…」

「……ああ。よく知っているさ。だからこそ言っている。やめておけとな」

「……………」

「……ドクター。お前は……あれの中に自分を見ている。もしもの自分を」

「いつの間にか投影してしまっているんじゃないか？自分のことを彼女に」

「……だとしたらやめておくんだ。お前とスカジとは別人なんだから」

「……先生。ありがとうございます。……でも、やっぱり僕は……救いたいんです。彼女を」

「……それがどんなに歪んだものだとしても、か。……まあいい、好きにしろ」

「ありがとうございます。……では、失礼します」

先生の部屋を出て、廊下を歩く。

頭の中では、先ほどの先生の言葉がぐるぐると渦巻いていた。

僕は、本当に彼女を助けようとしているのだろうか。

まさか、自分が助かろうとしているんじゃないだろうか。

……だとしたら、それは許されないことだ。

「……はあ。私も救いがたいな……」

ドクターの去った後の部屋で、ケルシーはひとり呟く。

夕暮れどきの空は雲一つなく、差し込んだ西日は部屋をセピア色に染め上げている。

そんな夕日の、網膜にちらつく色彩がケルシーを幾分か感傷的にさせた。

伏せておいた写真立てを元に戻し、その中に閉じ込められた過去を

思い起こす。

ケルシーは写真立てを握り締め、静かに目を瞑った。
瞼の裏に浮かんでくるのは、あの素晴らしき日々。

彼女の人生の中で、最も光り輝いていた時代。

―そして、もう二度と戻らない時間。

写真には、仲睦まじい男女の様子が収まっていた。

ドクターがケルシーと出会う話

彼女の目に映る世界は、いつも色褪せていた。

物心がついた頃、幼女の目に映るものは知らないものばかりだった。

底なしの好奇心、とどまるところを知らない知識欲。その頃の彼女は、ある意味情熱に燃えていたのかもしれない。

幼女が少女になったころには、もう既にその火は消えていた。

残ったのは冷めきった鉄のような心。あのころの面影はもうどこにもなかった。

彼女は天才だった。それも、この上なく。

その幼き頭脳は、科学史に名を遺すような発見を繰り返した。

彼女からすれば、それは緻密な論理の結論としての必然だったのだろう。

だが、それは彼女だけの科学だった。

世界は、彼女についていくことができなかつた。あまりに難解な理論は理解されず、その結果だけが空々しく称賛された。”神の贈り物” 魔術師” そんな言葉で飾り立てられた。

世界は、彼女にとって余りにも遠い場所だった。

そのことを知った瞬間から、彼女にとっての世界は退屈なものになった。

夜空を見上げ、思う。その気になれば、きっとあの空の星も手に入ることができる。

私の星。私だけの星。

でも、そんなものに何の意味があるのだろうか。たとえどんなに輝いていたとしても、誰からも知られていない星は、存在していないのと同じだ。

誰にも理解されないことを追い求めて何になるのだろうか。

誰にも理解されない私は、存在しないのと同じだ。

私は、何のために生きているのだろうか。

……奇しくも、その疑問こそが彼女の命をこの世につなぎとめた。命は、何故に存在しているのか。

誰にも理解されない、自分のためだけの研究。

そのために、彼女はすべてを捨てた。名誉、家族、そして名前。かつて天才少女として世間をにぎわせた彼女は、いつの間にか人々から忘れ去られていった。

そうして、彼女が生命の研究を始めてから数年の月日が流れたある日、そんな彼女のもとをある人が尋ねた。

……それがいったい誰だったのか、いったい何を話したのか。それはわからない。

ただ、結果として彼女は組織に入った。それだけは確かだ。

組織に入ってから、彼女の研究はそれまで以上に加速していった。豊富な資金力、充実した研究設備、機材。彼女が望んだものは、必ず手に入った。……それがどんなものであったとしても。

彼女の研究は、ようやく世界に認められるようになったのだ。

……だというのに、彼女はどこか虚しさを感じずにはいられなかった。

確かに、組織は彼女のことを必要としたのかもしれない。彼女は、世界の一部にようやく受け入れられたのかもしれない。

だが、組織の一員としているうちに、彼女の研究は彼女のものでは無くなっていった。いつの間にか、研究は組織のためのものへと姿を変えてしまっていた。

……彼女は、それを受け入れた。

それは、子供が大人になった瞬間でもあった。彼女はそこで諦めるということを知ったのだ。

幼年期は終わり、彼女は社会の歯車となることを選んだ。

これでよかった、これでいいんだ。そう自分に言い聞かせながら彼

女は組織を回し続ける。

自己を殺し、他者に身をゆだねた。一瞬色づいたかのように見えた世界は、瞬く間に灰色に染まった。

そんな無機質な日々が、幾日となく続いていく。

これが生きていくということなのだろうか。そんな疑問も抱かなくなつて久しいある日、彼女は出会った。

それは、出会いなどと呼べるほどロマンティックなものではない。

鉱石病に罹患し空きが出たポストの人員補充。何ともシステマティックなものだ。

初めはただ優秀な人材としか認識していなかった。出来のいい、見込みある学生。

だから彼女はスカウトしたわけではあるが、所詮はその程度の存在だった。

何百人というスタッフのうちの一人。それが彼だった。

——だというのに、いったいいつからだろうか。彼のことを意識し始めたのは。

……やはり、それはあの日だったのだろう。あの日、あの彼の決意を聞いた日。

彼女の人生は、きっとあの日から始まったのだ。

「おい」

真夜中の研究室。残っているのは自分一人だけだと思っていた青年は、背後からかけられた声に肩を震わせた。

「は、はいっ!?!……って、先生……?」

「……ここでは先生ではないと前に言っただろう。ここでは主任だ」

「……はあ……一度慣れたものを変えるのは難しく……」

「……まあいい。それより、こんな時間まで何をしてるんだ？」

他のスタッフはもう帰ってしまっている。ケルシーが残っていたのも書類をまとめていたからであって、本来ならば誰もいないような時間のはずだ。

「いや、今日のデータで少し気になるところがあつたので……」

「なら明日やればいいだろう」

ケルシーはあたりに目をやる。あちこちに散らばった器具が彼の奮闘を示しているように思われた。

「もう学生じゃないんだ、わざわざ居残ってやらなくてもいい。他のスタッフもみんな帰っているじゃないか」

「でも、やりたいんです」

そう言うと、青年はまっすぐな目でケルシーを見据えた。濁りのない、純粹で澄んだ目。

それを見たケルシーの脳裏に、かつての自分の影がふとよぎった。

「……そうか。まあ、好きにするといい。私は帰る」

「はい、お疲れ様でした、先生」

その場を立ち去りながら、いつまでもつかなく、と独り言ちる。

長いことここで働いていれば、あんなふうな奴を見たことも何回もあつた。

しかし、彼らは皆、社会に飲まれ、純粹だったその目は今や濁り切つてしまった。

……今の自分と同じように。そうやってケルシーは自嘲した。

それからは、というより元からそうだったのに気づいていなかっただけなのだろう。

深夜の研究室にはいつも青年がいた。早朝の研究室にはいつも青年がいた。

一体何が彼にそうさせるのか。ケルシーには理解しがたかった。

所詮は他人の研究だというのに。その時間を使って自分の研究をすればいいものを、なぜ私の研究に使うのだろうか？

疑問を抱きつつも、好きにしろといった手前、ケルシーは特に口出

しはしなかった。

気のすむまでやればいい。そう思っていたし、こんな状態がいつまでも続くとも思っていないからだ。

果たして、ケルシーの推測どうり青年は研究室に来なくなった。いや、これなくなつたという方が正しいか。

それはある朝のことだった。昼頃からのミーティングに備え、ケルシーは朝早くから研究室を訪れた。

資料をまとめたかつたのもあるが、どうせ彼もいることだろうし、現場目線の意見の一つや二つくらいは聞いておこうという腹積もりだったのだ。

予想通り、研究室の電気は煌々と輝いていた。よくもまあ続けるものだと思われ半分、感心半分といった面持ちでケルシーはドアを開けた。

「……」

特に反応はない。いつもだったら先生やら何やらと声をかけてくるはずなのにと少しばかり不審に思ったが、寝落ちでもしたのだろうと納得したケルシーは、自分の机に向かおうとして――

――血まみれの青年の姿を見つけた。

「……っ!?!」

慌てて青年のもとへと駆け寄るケルシー。青年の腕を取り、その脈拍を確かめる。

ドクン、ドクン――指先に伝わってきた確かな拍動に、彼女は心底安堵した。

取り敢えず救急部門に連絡をよこし、あたりを改めて見渡してみる。

額の切り傷に、机の角の血痕。どうしてそうなつたのかはわからな
いが、机に頭をぶつけたらしい。

「いや……」

……想像はつく。多分こいつは限界を迎えたのだろう。

朝早くから夜遅くまで延々と働き続けて、睡眠もロクに取って
いなかったのだ、いつぶつ倒れてもおかしくはなかった。

……私が止めなかったせいだろうか。そんな考えが浮かび上がってくる。

だが、ケルシーは首を振ってその考えを打ち消した。止めようが止めまいが、こいつはどこかの時点でこうなっていたはずだ。思えば、初めからこいつはどこか異常だった。単なる仕事好きなんかの域にとどまらない、もつと偏執的なものがこいつを突き動かしているような気がするのだ。

——一度こいつとちゃんと話し合わなければならぬ。

近づいてくるサイレンの音を耳にしながら、ケルシーはそう決意した。

目が覚めた。もう何度目かの見慣れてきた天井。青年の一日、今日も病室から始まった。

あの日のことはよく覚えていない。いつものように作業を進めようと思ったら、急に足元がふわふわとして——気づいたら病院にいた。どうやら頭を打っていたらしく、色々と検査をされたが、そっこのほうは大丈夫だった。

睡眠不足、それにストレス。それがこんな事態を引き起こしたらしい。

……心当たりはありすぎるほどにあった。

僕がここにいるのも、ここでゆつくり休んで気力と体力を回復しろということらしい。

……それでも、やはりもどかしい。

理解はできても納得はできない。それが青年の率直な思いだった。しばらくすると、病室にコンコン、というノックの音が響く。入るぞ、という言葉とともにやってきたのは何度目かの来訪客だった。

「体調はどうだ？」

「先生……ありがとうございます、わざわざ」

「……私の研究で倒れたんだ。見舞いに来るのも当然だろう」

やってきたのは彼の上司、ケルシーだった。

「ほら、お土産だ」

そう言って彼女は、紙袋からリンゴを取り出す。

「いろいろとすみません」

「……まったく、好きにしろとは言ったが倒れるまでやるとはな」

「ははは……」

ポリポリと頭を搔く青年。そんな彼に、ケルシーはある質問をする。

「……早く研究に戻りたいか？」

「はい」

即答。予想はしていたことだったが、それでもやはり驚かされる。

そのわずかな動揺が漏れ出すかのように、ぽつりぽつりとケルシーは言葉を紡ぎだした。

「……どうして……どうしてお前はそんなに研究に打ち込むんだ……？」

「……………」

「……これは私の研究だぞ。そんな……命を削るような真似をしてお前がやる必要なんてないんだ」

「……………」

「……なあ。何でだ？何で、お前はそんな……」

「……先生。先生はすごい人なんです」

「僕なんかよりも、ずっと。だから、先生の研究を進めれば僕がやるよりももっと多くの人が救える」

「……人助けだど？……それでお前が倒れたんじゃ、何の意味もないじゃないか。もっと自分を……」

大切にしろ。その後には続くはずだったその言葉が紡がれることはなかった。

青年が大きく首を振ったからだ。あなたは何もわかっていない。そんな風に言われたようにケルシーは感じた。理解ができない。この目の前にいる人物のことが。自分以上に大切なものなどあるのだろうか。

あつけにとられたようなケルシーに対して、青年は少し微笑み、言った。

「それが僕のすべてなんです。それだけが、人を救うことだけが、僕の生きている理由なんです」

「なっ……」

言葉が出てこなかった。遠い昔の記憶がよみがえる。

自分は、何のために生きているのだろうか？そんな疑問が。

とつくの昔にあきらめたはずのものだった。無為な日々を繰り返す、それこそが人生なのだと自分に言い聞かせて。子供じみた、陳腐な問いだと切り捨てたはずの疑問の答え。

ケルシーにはわかった。わかってしまった。目の前の青年は、その答えを持っている。何の疑問もなく、その答えを信じ切っている。

その時、ケルシーは生まれて初めて”羨ましい”と思った。

どこまでも純粹に、青年のことが羨ましいと思った。

同時に、ケルシーは思う。こいつのことを知りたいと。

如何にして、その答えにたどり着いたのかと。

……それは、彼女が初めて抱いた他者への興味だった。

彼が初めてだったからだろうか。

それとも、他の誰でもなく彼が彼だったからだろうか。

今となつてはそれを確かめる術はない。

けれども、いつ考えても結論は同じだ。

……彼が彼であつたゆえに、彼は私のすべてなのだ。

私の、生きる理由なのだ。

ドクターがケルシーとお祝いする話

病室でケルシーと話してから数日後、青年はようやく退院することができた。

その際には今度は睡眠をしっかりとれだとか、心理カウンセリングを進められたりといういろいろ言われたが、研究が再開できるということに頭がいっぱいだった彼は右から左へとそれらを聞き流した。

その様子に、担当医はまた近いうちにこの患者と対面することになると悟ったという。

だが、幸いにもその懸念は現実のものとはならなかった。

退院の翌日、早速現場復帰した青年は、やはりというべきか猛烈な勢いで仕事を進めた。

その勢いはとどまるところを知らず、当たり前のように他のスタッフも帰った後も続いた。

この真夜中の時間帯はいい。誰も仕事をしていないときにやる仕事は生の実感を与えてくれる。

青年がそう独り言ち、器具をセッティングしていた時だった。

「おい」

「わっ……せん……主任」

声をかけられた方を振り向くと、そこには呆れ顔のケルシーが立っていた。

「流石に今日くらいは……と思っただがな」

その表情と言葉とは裏腹に、どこかしら喜びが混じった声で彼女が言う。

それに対して、青年は何を言っているんだとばかりに返した。

「当然、やるにきまっています。入院してた分をちゃんと取り返さない」と……」

「……それが生きる理由だから？」

「そうです」

やや無然とした表情で返答する。

それを聞いたケルシーはうんうんと二度ほど頷いた。

やはりこいつは本当に答えを持っている。どうやってその答えを得たのか、どうしてそれが答えなのか、知りたいことはたくさんある。久しぶりに科学者としての血が騒ぎだしたような気がした。

「やるぞ」

「へっ?」

間の抜けた声を出す青年。目を白黒とさせている。

「入院していた時の分を取り戻すだろうか?早く準備しろ。私とて朝日は拝みたくない」

「せん……主任が手伝ってくれるんですか!?!」

「……先生でいい。二人の時はな。ほら、急げ。時間は限られてるんだ」

「……はい!先生!」

青年は勢い良く返事をする、薬品庫へと軽やかな足取りで駆けていく。

その後ろ姿を見送るケルシーの頬は、知らぬうちに少し緩んでいた。

それからというもの、ケルシーは度々深夜の研究室を訪れた。

彼女は、直に接することによって青年を観察し、分析し、様々な情報を蓄積していった。

”他者”という新たな研究対象。その研究は、ケルシーに久しく忘れていた”楽しい”という感覚を思い出させるものだった。

青年と研究室で一晩を過ごすたびに、彼女は青年の新たな一面を知った。

その大半は下らない、どうでもいいような情報だった。けれども、そのどれもが不思議と輝いて見えた。

……初めは、青年の持つ”答え”について知るための手段だった。けれども、その手段はいつの間にか、目的へと変わっていった。

手段と目的の取り違い。それは、本来ならばやってはいけない間違いなのだろう。

だが、その間違いがケルシーには心地よく感じられた。

その日は特に寒い一日だった。

年末の祭りを前日に控えた夜。青年は、いつものように一人研究室にいた。

同僚たちは、皆足早に帰っていった。ある同僚は息子にプレゼントを買うのだといい、またある同僚は家族とゆっくり過ごすのだという。

青年もその祭りがあること自体は知っていたが、義父は仕事でいないことが多く、まともにお祝いというものをしたことはなかった。だから、せいぜいプレゼントをもらえる日といった程度の認識だ。

そんな訳で、一人で過ごす聖夜はある意味青年にとってはいつも通りなのだ。

研究室も明日は休みだが、青年はこのまま泊りがけで明日もここで一人過ごす算段でいた。

先ほどから部屋中に響いていたキーボードを打つ音がぴたりと止む。

青年は一つ大きく伸びをし、ちらりと時計に目をやった。0時5分前。もうじき日付が変わる頃合いだ。

椅子から立ち上がってやかんに水を汲む。石油ストーブにやかんを乗せ、その前に座った。

別にお祝いというわけではなく、眠気覚ましにコーヒーでも淹れようと思っただけだ。

赤熱するストーブを眺めながらぼうつとしているうちに、青年はふとある人のことを思った。

——先生はどうしているんだろうか。

初めて会った時から、本当にすごい人だと思った。自分なんかじゃとてもかなわないような、本物の天才。雲の上の存在だった。

スカウトされて組織に入ってからも、それは変わらなかった。確かに組織にはたくさんすごい人がいるけれど、先生程の人はいない。

……そんな人が、僕のことを気ににかけてくれるようになった。
きつかけはここで倒れたことだ。無茶なことをして自滅した僕のことを、先生が助けてくれた。

その時からだ、先生と過ごす時間が増えていったのは。

いろいろなことを教えてもらった。先生のような人の指導を一对一で受けられるなんて、夢みたいだった。

面白いことにも気づいた。いつもは冷徹でポーカーフェイスの先生だけれど、実はからかい好きで、笑いもすれば怒りもする、そんな人だということだ。

それがわかってからは、近寄りたかった最初のころの感覚は消え失せていった。

先生は雲の上なんかじゃなくて目の前にいる、それがわかったから。

今では、先生と過ごす時間はとても……その、楽しい？ものに感じられるのだ。よくわからないけど。

——聖夜というのは大切な人と過ごす日らしい。

僕にとつてそれは父さんだ。……先生にとつては誰なのだろうか。

先生は、その人と過ごしているのだろうか。

火照った頭でそんなことを考えているうちに、徐々に瞼が重くなってくる。

そんな睡眠の誘惑と格闘していたからだろうか。青年は背後の物音に全く気が付かなかった。

「今日はもう寝るのか？珍しいな」

一気に眠気が覚める。慌てて振り返ると、ニヤニヤと笑うケルシーがそこにいた。

「先生!?……いつからそこに?」

「今さっきだ。……お前が眠気と戦う様は中々面白かったぞ?」

「じゃあ早く声をかけてくださいよ!……まったく!」

「まあそう怒るな。今日はいいものを持ってきたんだ」

そう言うと、ケルシーは後ろ手で隠し持っていた袋を見せつける。

それはなにかという青年の問いを無視し、ただ開けてみるとだけ言

うケルシー。

訝し気な表情で袋の中にあつた箱を開けると、そこには可愛らしくデコレーションされたケーキが入っていた。

「これって……」

「運良く売れ残りがあつてな。……少し二人分にしては大きいが……まあ、いいだろう?」

「わざわざ買ってきてくれたんですか?」

そんな青年の問いに対し少し気恥ずかしさを感じたのか、ケルシーは目線をそらしながら言った。

「……まあ、なんだ、ちよつとしたご褒美みたいなものだ。……色々と手伝ってもらつたしな」

「そんな、僕の方こそ色々教えてもらつて……」

「ああ、うるさいうるさい。こういう時は素直に受け取っておけ」

青年の言葉を遮り、ぶつきらぼうに言うケルシー。

それを聞き、青年も不承不承といった感じで頷く。

次いでなにかケルシーが言いかけたところで、窓の外から鐘の音が響いてくる。

時計の針は零時を回り、既に日時は祭り当日となっていた。

「……せつかくだ、お祝いでもするか」

「……」

「どうした? 私とでは不満か?」

からかうようにケルシーが問いかける。

「違います!」

青年は慌ててかぶりを振った。だが、その後が続かない。

二人の間に暫しの沈黙が現れる。

……やがて、青年はおずおずと口を開いた。

「……僕なんかでいいんですか?」

その声はかすかに震えていた。

青年のそんな様子を訝しんだケルシーは尋ね返す。

「何がだ?」

「……こういうのは、大切な人と過ごすものだって聞きました。……」

先生。僕にそんな価値はありますか？いつも先生に迷惑をかけている僕に、そんな価値はありますか……!?」

……青年の歩んできた道のりは、彼の自己評価を限りなく低いものにしてしまっていた。

その人にとって役に立つか、立たないか。価値という概念を歪んだ形で植え付けられた青年は、これまでの人生で必死に自分が役に立つ存在であることを示そうとしてきた。

……裏を返せば、それは元の自分には価値がないものだと思っただということだ。

それ故に、彼にはケルシーの言葉が信じられなかった。

祭りの日を共に過ごす。それは、彼がいまだかつて経験したことのないものであり、尚且つ彼はそれを当然のものとして受け入れてしまっていた。

価値ある存在だけが選ばれる神聖な儀式。彼の中で、その存在は神聖視されていたのだろう。

勿論、ケルシーにその様な認識があつたわけもない。

彼女にとって、このイベントは灰色の毎日のごく一部にしか過ぎなかつた。

かつていた”カゾク”という存在によって進行される、年に一度の行事。

いい思い出などあるはずもなかつた。

だからこそだろう。彼女が青年に声をかけたのは。

冗談交じりに提案して見せたのも、きつとそれは彼女なりの照れ隠しなのだ。

本人はまだそうとは意識していない——正確には認めようとしていない——が、彼女な中で青年の存在は大きなものとなっていた。

面と向かって言うのは何となく気恥ずかしい。だから彼女はこんな回りくどい手を取ったのだ。

だが、そんなケルシーの思惑は脆くも崩れ去ってしまった。

懇願するようにこちらを見つめてくる青年。その視線に、彼女の仮

面はあつけなく剥がされてしまう。

貼り付けた笑みを捨て去り、彼女は青年と向き合う。

ケルシーは優しく微笑むと、彼に語りかけた。

「……お前は……その、私の大切な……弟子だ」

「……弟子は迷惑をかけるものだろうか？だから……いいんだ。お前はそれで」

「……お前は、いてくれるだけでも価値があるんだ」

そこまで言うと、ケルシーは顔を背けた。

「ほら、弟子らしく早く準備しろ。どうせコーヒーでも飲むつもりだったんだろう？私の分も淹れろ」

それだけ言うと、自分の部屋のほうへと歩いて去っていく。

その頬がほんのりと桜色に染まっていたのを知る者はいない。

ただ、ケルシーはやたらと顔が熱っぽいのを感じていた。恐らくストーブのせいだろう、そう思っていたが。

「……………」

青年はただその後ろ姿に向かって深々と頭を下げた。温かい何かを頬を伝っていく。

はじめて言われた「価値がある」というその言葉。青年にとってどれほど重みのある言葉だろうか。

もはやそれ以上に言葉などいらぬ。いるはずもなかった。

「先生。お待たせしました」

しばらくした後。青年は二人分のコーヒーを淹れると、それを手にケルシーの部屋を訪れた。

堰を切ったように流れ出たそれを押しとどめるのには、随分と時間がかかってしまった。

さすがに今は落ち着いてはいるが、よくよく見れば青年の瞳が少し赤くなっているのが見て取れたことだろう。だが、それを指摘するのは野暮だというものだ。

部屋に入ってきた青年に対して、ケルシーはニヤツと笑って言っ

た。

「中々に時間をかけるじゃないか。……どうだ、美味しいのが入ったか?」

「……ええ。ま、ちよつとしよっぱいかもしれませんがね」

こいつめ、と嬉しそうに笑うケルシー。お返しだとばかりに笑い返す青年。

両者とも、もう湿っぽいのは終わりだと言外に告げあっていた。

そう、何せ今日はクリスマス。年に一度の特別な日なのだから。

「あ、先生。ケーキ出しといてください。僕は食器を持ってきます」

「わかった。……柄にもなく興奮しているな」

「それはそうですよ。初めてですから」

「……初めて、か」

「はい。先生は?」

「……いや、私もさ。私も、初めてだよ」

箱を開いてケーキを取り出す。ナイフでカットしてそれぞれの皿に取り分ける。

トナカイとサンタの砂糖細工を、どちらがトナカイを食べるのかで言い争う。

そのどれもが青年にとって、そしてケルシーにとって、初めての体験だった。

美味しいケーキと美味しいコーヒー。その二つを燃料として、机を挟んだ二人の会話は続いていく。

いつしか、話題は青年の将来の話へと移っていった。

「で、お前はその後どうするつもりなんだ?」

「その後?」

「鉱石病の治療に目途が立った後だ。何もずっとここで研究を続けるわけじゃないんだろう?」

「そうですね……やっぱり、父さんの診療所を継ごうと思ってます」
「今までの分をちゃんと返さなきゃいけませんから」

しばらくの沈黙の後、青年はそう答えた。

「父親の？」

「はい。町のお医者さんっていう感じの人なんですけど——」

嬉しそうに語る青年。そんな青年の話を聞きながら、ケルシーは考えていた。

自分に家族はいない。当然、父親もいない。

かつて”父親”だった人のことを、自分はこのような顔で語ることが出来るだろうか。

果たして”父親”とは、どういった存在なのだろうか。

「——だから僕は、感染者の人たちにも同じようなことをしてあげたいと思ってます」

「今やっている貧しい人たちへのものと同じように、か」

「はい。誰よりも助けを求めている人達ですから」

「そうか。……なら、その為にも研究を進めないのだな」

「はい……そういえば、先生はどうなんですか？」

「私か。私は……」

そう言うと、ケルシーはちらりと青年の顔を見た。：いや、見てしまったと言うべきか。

これからのことなどよく分からない。これまで当てもなくただ生きてきた。そしてそれが続くと思っていた。

：けれども今は違う。俯いていたその視線を未来に向ければ、そこには彼がいる。

青年こそがケルシーにとっての未来そのものなのだ。

だが、それを素直に認めるには彼女はまだ青すぎた。

それほど意識しているというのに、そのことを頭では理解しているというのに、どうにも認めがたいのだ。

視線を感じ、不思議そうな顔で自分を指さす青年。

青年を意識してしまったという気恥ずかしさ。それを彼を揶揄うことで誤魔化そうと、ケルシーは小さく笑う。

「まあ、先ずはこのポンコツ弟子を一人前にすることだな」

「うわっ。先生、いくら何でもそれはひどいですよ」

大げさな声を上げる青年。対して、ケルシーはピシヤリとはねのける。

「うるさい。お前はまだまだそんなものだ。ほら、手術の練習をするぞ」

「ええ!?今からですか!?!」

「お医者さんになるんだろう? 頑張れよ、ドクター。……っ」

「……先生。今絶対に笑いましたよね」

「いや、そんなこと無いぞ、ドクター」

「絶対馬鹿にしますよね?! ドクター(笑) って言いましたよね?!」

「……ほう。私にケンカを売るとはいい度胸だな。……今日はみっちり扱いてやるから覚悟しておけ」

「……理不尽だ」

青年の眩きは、暗い廊下へと吸い込まれていった。

別に馬鹿にしたかったわけじゃない。今ならわかる。

あれは、ちよつとした照れ隠しのようなものだったのだと。

……我ながら、程度が低いな。
でも。

お前は今でもその名前を使っているな。

別に特別な名前でもない。誰でも付けられるような名前だ。
だけれども。

……それを私と関連付けるのは、少し自惚れが過ぎるだろうか。
なあ、ドクター。